第四篇　社會過程の集團性

第一章　集團活動

一　社會過程の統一性　吾々の既に說く所によつて、社會過程の事實はその要素的形態として集團人の社會的行爲に於いて捉へられる。社會的行爲はかくて社會過程の究極的・分析的事實であるが、人々の間にいとなまれる多數の社會的諸行爲は、個々に獨立したものではなく、相互に作用・反作用の形をとり、殊に意味的に相對應する關係を現はす點からして、社會過程の內部において夫々一聯づつの環節的事實を組立て、ここに社會關係現象と稱する統一形態をなすことは吾々の次いで觀取し、論考した事柄であつたのである。社會過程の關係的統一性の事實がこの點にあり得たのである。然るに、總べての社會過程、從つてあらゆる社會的行爲とそれを要素として實現される社會關係現象は悉く社會集團內部の作用・活動として、畢竟その地盤として一定の集團的環境を齊しからしめて居るのであるから、この集團的全體性に從つて改めて綜合されるやうな特殊の活動性を呈露することを事實とする。これ社會過程の究極的統一形態であり、これは云ふ迄もなく分析的要素的現象ではなく、又現象の單なる內部的關係の事實ではあり得ないが、現象の外部的綜合の結果として取上げらる可き充分なる理由を具へて居る。

吾々は人間關係的事象たる社會過程の悉くが原理的に一定の社會集團を俟ちその內部において生起し躍動する現象

であると見做す。從つて、一部の社會學者が、社會過程を必しも集團的範域に行はれると限定せず、所謂社會外的關係或は作用としてその外部に食み出でることを許し、その結果、社會過程と集團的存在の一致關係を考へ及ばなかつた態度を認識不足以外のものではないと判定する。[1] 吾々の正しく觀察する所に從ふならば、社會的諸行爲乃至社會關係諸現象は彼等が假令如何樣のものであらうとも、皆何等かの社會集團を前提し、その範域內において展開する性質の現象をなすのである。而して、社會過程が一定の社會集團を前提とし、その範域內に生起する現象であることは、獨り社會過程が常に特定の集團に所屬する生活活動である許りでなく、又同時にかくの如き集團範域が確定的な共一的境遇を隨伴しつつある關係からして、彼等は一定の統一的特質を持つ作用形態たることに迄規制される。かくの如くして、社會過程の最も要素的なる社會的行爲にしても、又關係的統一形態たる社會關係現象にしても、彼等はすべてその地盤をなす一定の社會集團を限界として、綜合的現象性を實現するに至ることは必然的結果であると見なければならぬ。

社會過程が集團的に統一ある作用現象として綜合されることは、簡單なる表現を以てすれば、集團的全體の活動を實現することであり、總體的現象性の事實そのものである。社會過程がそのやうな集團的全體の活動、總體的現象性を呈露・實現する側面を具ふる以上、吾々が社會過程を攻究するに際しては、又當然かくの如き現象性に注目し且その意義に目ざめ、事實の考察からそれの本質を認識する所がなければならない。社會過程に對して、屢々、この現象が個人的事實に非ざることを主張する者があつて、事實が個人主體的現象とは正に對蹠する樣な集團を主體とする個人超越的事實であるといふことが力說されたのであるが、斯樣な見解が訂正と批判を要する幾多の缺陷を包藏するにせよ、社會過程が或る一面において集團的全體性によつて特徵づけられる統一的現象をなす關係が注意せられたことは、むしろ當然であつたと稱す可きであり、吾々は今、この點において社會過程の現はす特別な一樣相を注目せしめられる。事柄は恰も社會關係現象に於けるやうに、社會過程の價値關係的統一形態であつて、而も關係現象に於けるよりも一層高度の綜合現象の形態に於いて問題が提供されて居る。これ卽ち社會過程の集團的統一形態の實であつて、本篇においてこれを題目としたい所である。

註1　第一部、第二篇、第三章、第七節、註1。

二　その觀察

あらゆる人間生活にしてかの社會的行爲を具現せずに居るものは至つて稀である。すなはち人間諸行動は假令程度は輕微であつても、主觀的意味性を有する點に行爲の概念を充し、これと同時にこの人間行爲が又推しなべて他人關係性を具現することからして、社會的行爲をなし社會過程を實現するのである。ここに人間生活が卽ち社會生活なりと稱せられる理由が存する。然るに、他の一方に於いて、人間生活が社會生活であるといふ今一つの理由が發見されるのであつて、それは人間生活に集團每に或る特異的性狀が觀測されることから來つて居る。そしてこの方面において、人間生活を集團的に統一ある所の生活形態として把握し說明することが種々の機會に於い行はれたのに接するのである。例へば歷史家は歷史上の人間生活・社會過程に對し、本來その要素をなす諸個人の社會的行爲に迄徹底して解釋を加へるのではなく、それに對し集團的把握を適用せしめる。歷史家と雖も對象をなす社會過程が要素的に個々人の社會的行爲に基づくことは充分これを承認する者であるから、彼等が社會的行爲を全然閑却するを責む可きではない。否むしろ、歷史家は個々人身邊の諸現象に關する限り、之を廣汎に社會的行爲から說明

する方針を採用する者であつて、政府部内の活動、國際談判の進行の如き、皆此樣々な方針の下に説明解釋されつつあるのである。ではあるが、他の一方において、集團一般の現象に就いては、内部の個々人の態度を一々穿鑿して説明することをなさず、好んで集團的現象として解釋する仕方が採られることは、吾々として見遁し難い點とするのである。

例へば民族生活や階級闘爭の如き事實を取扱ふ際に於いて、彼等が果して如何なる手續を選ぶかを見よ。此種の現象と雖も、究極的な問題としては、民族や階級内部の諸個人の營む無數の社會的行爲の集合現象に外ならないのであるが、それにも拘はらず歴史家はこの種の集合現象に向つて、諸個人の社會的行爲であるといふ見地から現象を分析的に要素化して説明する煩をとることなしに、民族・階級等の集團を特質的な社會過程の母體であるとし、之を單位概念となし又或る場合之を擬人化し、現象をこの集團的主體から説明する態度に出でるのである。乃ち民族或は階級は斯々の狀勢の下に是々の態度・意志を有し、以て所定の行動に出でたといふが如きがそれである。今吾々がこの種の説明を以て、民族或は階級が固より夥しい人數から成立つ關係上、彼等一々の微細なる社會的行爲を學問的取扱に入れることが研究手續上至難のことに屬し、この點から止むなく選ばれた簡捗手段であると見るのは一個の解釋たりうるであらうが、若しそうであるとしても、ここに選ばれた集團單位的説明にして實際上何等根據の無いものであるとしたならば、歴史家と雖も此理由無き手續に頼つて説明を下すことは全く不可能のことであつて、史學的説明の妥當性に疑義が生起せざるを得ない筈である。

然るに、此種の方針に出づる歴史家の説明は、多くの場合に於いて、反つて有效なることを立證するのが事實である。すなはち多數の例において、現象の客觀的經過がかかる説明手段によつて矛盾なく捕捉され、その説明を聽取する吾々も亦それによつて滿足せしめられる。あまつさへ、當該説明の充分首肯に値することは、吾々をしてそれ以外の要素的解釋の無用であるといふ印象さへも抱かせる程度のものである。事實上、さきに擧げた所の、社會的行爲を中心とする分析的説明が妥當し得る現象に對してさへも、これを改めて集團主體的見方によつて説明し直すことが出來る程である。否、集團主體的説明に之を引直すことによつて事柄は一層充分に解釋し得られる場合さへも發見されやう。例へば、一政府の採用する諸政策に就いて云ふも、國際談判の成行に就いて云ふも、これ等の事實は政府部内の集團的狀勢や、或は參加國個々の集團的態度からして根本的な理解を與へられるであらう。此等諸事實を通し、少くとも純然たる關與的個人の社會的行爲のみからして大に徹底した理解の與へられないことは、多くの實例に於いて動かす可からざる事實をなして居る。歴史的人物は集團的背景の下に於いて始めてよくその態度、行動が解釋されるのであつて、個々人が集團的存在の肢體であるといふこと、その行爲・生活が環境の如何に依存するといふこと、又如何なる天才・偉人も時代の産物であるといふこと等が、現象の基底に潜む深い事實關聯を云ひ表はすものであらうと思ふ。[1]

註一　史家クーランヂは希臘・羅馬の古代社會研究から、個人的「精神は社會の賜である」(L'Âme est la fille de la cité.) との標語を結論し、社會學者イズーレーは古代社會のみならず現代社會に於いても亦、その事の立證されることを廣汎に論述したのであつた (J. Izoulet, La cité moderne.)。

三　その問題

史學の説明問題として社會過程を集團中心的に解釋する事實は右の如くに至つて著明なるもの

であるが、これは獨り過去の時代に屬する歴史的現象に就いて然るのみならずして、又現代、現實の社會過程に對する吾々日常の解釋がその轍を踏んで行はれつつあることを發見するものである。例へば吾々日常の思考、會話、新聞記事等をつらつら反省し、觀察する時、一國の生活過程を統一ある集團的現象と見做し、そこに特殊的性狀を發見するが如き、又一政黨の政治活動を以て當該政黨の團體的野心の表はれであると認むるが如く、すべて社會過程を集團主體的に說明する例に接するであらう。歴史家の場合において集團中心的說明の成立ちうることが、社會過程的生活現象が集團を中心として解釋し得られる特殊の理由が示唆されてあつたやうに、常識的說明の場合に於いても亦、この種の見方が事柄の實際認識上矛盾せぬ經驗が根本に支配しめつある。特定社會集團內に展開される社會過程は、總體的に多少とも或る統一性を具現するのであつて、この事あるによつて社會過程は集團成員たる個々人に屬する社會的行爲に迄溯源せられる必要を見ず、集團の統一的現象として集團主體的觀點より把握し說明し得られる譯である。然らば、此種の現象に對する社會學的基礎附けは從來如何樣に行はれて居つたであらうか。

吾々はこれを回顧するに當つて、先づ人種學的社會學、地理學的社會學等、所謂環境學的社會研究の諸理論を想起する所がなければならない。云ふ迄もなく人種學的社會學、地理學的社會學等は人種或は地理の條件・規定に從つて社會事象の理解が到達せられることを信ずるものであるが、彼等は集團の差異に從ひ其等の條件・規定の變化することと、而してその變化を直接社會過程に於いて捉へたものとして、この場合興味少からざるものである。[1] 畢竟、彼等にあつては集團的社會過程を外面的に統一づける契機に重點が置かれたと謂ふことを得るであらう。然るに第二に、同じく社會過程の統一的樣相を說明す可く、主體と見做される集團的存在其者を固有の獨立的生物であると考へる生物學的見方が成立ち得たのである。これ社會有機體說がこの問題に又立入り來つた點であつて、今社會有機體說はその固有の社會構造論的論議に於いてではなく、それが隨伴する社會機能論的主張に於いて、社會過程の集團統一的活動性に觸れ來つたのである。[2] 思ふに集團そのものを直ちに有機體と觀ずることは、社會有機體說そのものの未完成の形態に過ぎないであらうが、この未完成の形態に於いてして、既に社會過程の內面的統一の側面が暗示されるのは、吾々の見遁し難い點をなすと信ずる。

社會有機體說がその高度の完成形態において生物學的類推から把持する社會の觀念が決して單純なる集團そのものに存するのでは無く、主として社會形象的事實に存する關係上、この學說の高度形態の集團主體的社會過程に對する理解と說明とは、必然的に社會形象たる文化事實からの解釋たる實を示し、一面に於いては新に文化的環境より實の外面的統一性に妥當しやうとすると共に、他面に於いて又更に特殊の文化事實が發揮する社會統制の機能に應じて、その內面的統一性に徹しやうと欲する。從つて、有機體といふ捉はれたる概念を拋棄したのではあるが、近來に於ける文化社會學と雖も實質的に社會有機體說の繼承者たる點に於いて、說明原理上「全體的思考」といふ新旗旆を打ち樹て、事實の集團統一性を同じく如上二つの方面に於いて理解す可く努力したのであつた。[3] 吾々は既に社會過程の集團主體的統一傾向について大體これを承認す可き立場におかれたのであるが、今それを基礎附けんとする二三の學說を一瞥することによつて、若干の理由の存することも印象附けられた。事實が現に集團中心的統一性を呈示するものである以上、そこには必ず然かある可き條件・理由のふくまれるのは當然の事であつて、此新事態の攻究に向つて進出するは疑ひもなく吾々の義務に屬するであらう。

註1　拙著、社會學原論、一〇六—七頁。
2　拙著、同上、一一〇—一一一頁。
3　拙著、同上、第二篇、第六章。

四　集團活動と其意義　社會過程が常に社會集團を範域として實現される生活活動であると共に、特定集團を地盤として展開する一群の社會過程には當該集團を中心とする何等かの統一性の見出され、これが故にこの一群の社會過程を當該集團の統一的現象として把握し得る關係に置かれるのは事實であるが、吾々はかくの如く認められ、かくの如く把握される社會過程の現象を集團活動（Group or Collective Action; Massenbetätigung）と命名することとしたい。集團活動とは、そこで、社會過程の集團的範圍に於ける統一現象であり、約言するならば集團的見地に於いて把握され得る社會過程の綜合的樣相をいふものである。[1] この意味に於ける集團活動の現象が吾々の經驗上、社會過程の營みの內に廣く發見されること、並びに社會過程をそのやうな場合において躊躇なく集團的主體に結びつけて說明することが現象の解釋上有效であることは縷述した所であつたが、その理由により吾々は社會過程の重要なる一樣相として此集團活動を考察しなければならない。過去において社會過程を論ずる者の場合、集團活動の方面に向つて一義的注意を集注し、社會過程を唯單にこの方面に限つて研究の對象としたといふことが、穴勝無意義でなかつたことも亦了解されると思ふのである。

ただここに改めて反省す可き問題は、過去に於けるこの方面の研究者が集團活動の事實を示唆し、顯現した所の貢獻は吾々が其價値を認めるに吝さかでないにも拘はらず、もと社會過程は要素的にいつて集團的諸個人の個人としての社會的行爲に源を發するものであるから、集團活動の事實を適當に考察する際に於いては、これに前提となつて居る全體的見地が何等理由なく前提されて居るのではなく、かかる見地を許容し且要請するやうな根據が必ずや社會過程の事實的關聯の內に含まれて居るといふことを思ふ可き點である。現に、ただ一義的に社會過程の集團活動觀を措定する傾向に對しては個人主義的社會觀よりして、個々人が常に能動者であり、活動主體たる所以を力說することによつて集團活動の假象にすぎないこと、その主張の擬裝的であることが反駁され、之に對しては、理論上叩頭せざるを得ないのである。[2] 善かれ惡しかれ、凡ゆる社會過程は要素的に個々人の社會的行爲の集合的な現はれ以外のものではないのであつて、吾々は事實問題として個人主義的社會觀の正當なる理由を認めてかからなければ嘘であらう。[3] 而して、かくの如き見方は集團活動の樣相を採る如何なる社會過程と雖も、畢竟は個々人の活動の集積以外のものでないといふ合理的見解をなすであらう。

然し、これと同時に、吾々は或る條件の下において、その現象が集團的に統一ある活動形態として把握される理由の存することも豫め容認しなければならぬ。吾々が經驗上集團活動を社會過程の分野の內に觸知することを得るは、恐らくそのやうな理由の存する場合に限られて居るであらう。そのやうな場合に、社會過程に一定の集團中心性乃至主體性が檢證されるならば、此集團活動に對して實在性が當然承認されることとなるであらう。凡そ總べての實在性は、認識上に於いて特定の作用的統一以外のものではないのであつて、集團活動にして特定作用の統一形態たる以上實在的たることに何の不思議もないであらう。集團活動はかくして社會過程の特殊的表現形式であつて、吾々はこの關係よりこのものを社會過程の第三樣相として採る必要に迫られる。然も事實上、社會過程が顯著なる集團活動的樣

相を取得するのは條件の如何に拘はるものであるからして、吾々は恐らく社會過程一般を直ちに理想的狀態の集團活動と見做すことを留保す可きであらう。一定條件の具備する所に完全なる集團活動の事實を認め、その場合に於いて社會過程は「生ける有機體」の生活現象に比せらるるであらうが、逆に條件の不備、缺如の場合、吾々は唯微弱なる集團活動を立證しうるだけであり、或は何等集團活動を云々し得ざることを豫想せねばならぬ。集團活動の眞相がそこに存する。

註1　エルウッドは集團的統一と集團活動（Unity of the group and group action）の名の下に、社會過程の集團的共一性及び方向上の統一性を意味せしめ、彼の意味に於ける「集團活動」とは個々人の活動がある一定の方向（a given direction）へ相互的に調整する事實であるとした（Ch. Ellwood, Psychology of human society, Ch. V, p. 238-9.）。私はこれら双方をこめて集團活動の概念とする。但し、エルウッドは彼の所謂「集團的統一」に對し、他の機會に於いて（Ellwood, Sociology in its psychological aspects, p. 191.）集團個性或は集團人格（Group individuality or personality）と稱し、この集團個性は「全體としての集團の固定した性格」であるといふのであるが（p. ibid.）、かかる意味ではこれ集團內部に成立つ社會形象即ち文化事物の特殊的性格として始めて意義を持つ可きものであり、私が社會形象論に於いて社會性と名づけるものに一致するのである。

マッケンヂーは集團活動を團體活動（Corporate Action）と稱する（Mackenzie, Outlines of sociology, pp. 50-51.）。彼に於いては、然し、集團活動の內社會統制による方向上の一致の方面のみが取扱に上せられた。ホッブハウスも亦「共同活動」（Common Action）の名の下に矢張りその種類だけを念頭においたのである（Hobhouse, Social development, p. 187.）。恰もエルウッドの集團個性の概念に於けるやうに、ホッブハウスは寧しろこの共同活動に共同性格（Common Character）を意味せしめ、かくて私の所謂社會性の概念とした節も亦存する（Ibid., p. 189.）。併し乍ら、事實が活動的特質のものであり、之を集團中心的に把握する限り、オッペンハイマーが「人間集合活動」（Betätigung menschlicher Massen）と概括した仕方は、一應之を容認しなければならないものと考へる（F. Oppenheimer, System d. S., I.）。

2　ドーリッシが"Der Einzelne ist stets der Träger"と道破したのは前にもあげた。デュルケムが社會事象の超個人的集團的特性をいへるに對し、タルドが個人主義的見地から鋭く反駁したことをも亦回想す可きである（Ginsberg, Studies in sociology, p. 83 et passim.; Tarde, Lois de l'imitation, p. I.; Ibid., Etudes de psychologie sociale, pp. 5, 72, 78, etc.）。ジムメルの見解も亦然りであるが、ジムメルはなほ個人的行爲から集團活動は構成されてくるといふ合理的見地に立つのである（G. Simmel, Probleme der Geschichtsphilosophie.）。

3　圓谷弘氏は個人主義的社會觀を止揚する集團主義の見地を何等の理論的前提なしに採用する點に於いて、本文指摘せる非科學的の立場を暴露せる一典型をなした（『集團社會學原理』）。從つて氏の著述は原理と名づけられるもこれドグマの意義であり、科學的に何等の寄與も學界に與へたりと思惟されえないであらう。スタッケンバークは集團活動を中心的事實と考ふる社會學者の一人であるが、彼は「社會とは個人の心的相互作用によつて構成され、この事は本質觀念である」（Stuckenberg, Sociology, I, p. 81）とし、「敎示し、確信せしめ、決意された意圖の最も有效なる實行の爲めに獲得された諸力を結合すること（集團活動！）が社會生活の三つの支配的因子である」（Ibid., p. 120.）といふ言葉の內に、集團活動の樣相を含蓄せしめたのを見る。

第二章　集團活動の形態

一　集團活動の諸狀態

吾々が現實行はれる社會過程に觀察の眼を注ぐならば、社會集團の異るに從ひ、集團

活動的事實が一樣に顯著であると許すことを得ないのを覺える。國家活動と都會生活、殊に現代大都會生活とを比較するならば、何人と雖も國家活動に見出される集團活動の極めて著しいのを疑問に附する者はないのであるが、之に反し、都會生活における同樣の事實に對しては、その實在を怪まずには居られないのである。國家活動の場合、國民全般の行動、生活に於いて普遍的な民族的性質・特色が立證せられ、而もそのやうな性質・特色は拔く可からざる牢乎たる力を以て支配し、全社會過程をあげて統一的な作用形態たらしめて居る。それのみではないのであつて、此國家內部の社會過程は、それがもとより國民各自の行動・生活より成立つものであるにも拘はらず、國家的全體の爲めにする國家中心の企圖たるを示し、この意味の下に一層高度の統一的作用形態たることを立證する。これに比較するならば、都會內部に行はれる社會生活は、特異的傾向・特色を有する統一的形態たることが抑々程度上に於いて少い許りでなく、現代大都會等に於いては所謂無政府狀態の個人主義が行はれるが爲めに、集團本位的統一作用たる點は極めて薄弱のものとなり了つて居る。[1]

これは獨り異種類の集團に於ける夫々の社會過程の相互的比較や、種類に於いて相同じき諸集團の夫々の社會過程の相對的對照によつて發見される事實たる許りでない。假令同一集團に例をとつても、吾々はその異れる時間的經過の內に於いて、集團活動の著明に觀取される狀態と然らずしてそのものの弛緩し、解消に瀕する狀態を交互的に見出すであらう。例へば新らしい植民部落に於いては、そこに營まれる生活・活動には何等特色・傾向の點に一致する動きさへもあらはれず、況んや部落本位的運動は未だ毫も觀取される點はないのであるが、五年の後十年の後、ここに於いても亦傾向・特色上統一ある作用形態と、更に又集團中心的運動形態の生起し來るのに接することが出來る。民族の如きは、長年月に互る集團狀態の持續と生活過程の反復とによつて、多くの場合集團活動を確定的に實現するに立ち至つて居るが、此民族とても文化混沌期を迎へ、或は永續的な惠まれた平和的環境の下などに於いては、その集團活動は或は傾向・特色の方面に於いて或は又集團中心性の方面に於いて、減縮・陵夷を示さない譯には行かない。而も此民族が一旦文化統一時代に入り或は戰時狀態を迎へるならば、今迄低下を來した集團活動は、頓に向上の一途を辿り、從前の時代に增した顯著なる狀態を回復・復興するに至るのが事實である。[2]

かくの如く、一集團の社會過程が集團活動を顯著なる形の下に實現するものと、然らずしてその微弱なるものとがあり、又同一集團に例をとるも、集團活動は時あつて隆替・消長を示すことを認めなければならない關係にある。ではあるが、社會集團を單位として社會過程を見る限り、このものに集團統一的な何等かの傾向が發見され、そのやうな統一的傾向に從つて社會過程が集團活動の概念に一致する樣な樣相を呈示することに至つては、實際問題として否定されう可くもない。畢竟多くの場合集團活動の存在することは問題でないが、そのものに確定・不確定の程度や或は種類に於いて異る所の形式が存在することを知らしめられる。集團活動と云へば事柄は簡單の如くであるが、實際においてはその狀態が問題の存する所であつて、集團活動の事實の理解に關する限り、この事は特に必要なる題目を提供して居る。蓋し、集團活動の諸狀態を吾々がよく〳〵檢討するならば、事實は集團的に統一ある社會過程以外のものではないにも拘はらず、その實、內容的に可成異質的と目される諸形式をふくむといふのが事實をなし、この異質的諸形式が集團活動的現象の諸狀態を貫いて頗る複雜な表現樣式を決定しつつあるからである。吾々はそこに適當なる分析を試みなければならぬ。

註1　私はここに現代大都會を理想型的に例示したのであつて、個々の大都會に於いて集團活動が力强く成立を見ることを決して否定しやうといふ考を持たないのである。

2　現代階級がその發展段階に應じて、集團活動殊に高度の集團中心的集團活動を實現し來る事實の如き、この關係を如實に立證するものであらう。

二　集團活動の內容

特定の社會集團を範域として展開せられる統一的な社會過程について、集團活動を認めるのであるが、吾々は先づこの集團活動の概念の下に包括される社會過程が、個々の要素的社會行爲そのものに於いて、共通的傾向のものであるのを認めてよいことであると思惟する。最も模範的な集團活動として例示された國家活動に就いて見よ。そのものに於いては、國民全般の行動・生活の內に普遍的な或る民族的性質・形式が力强く擴布・支配しつつあることが立證されるのであつて、かくの如き普遍的性狀は卽ち要素的社會行爲の共通的傾向以外のものではないであらう。更に又、國家活動が高度の集團活動をなすは、同じ要素的社會行爲の大多數のものに於いて國家全體の爲めにする意味で、集團中心の企圖が實現されて居る點に存するものであるが、この事實も亦、要素的社會行爲のふくむ共通傾向の一種にすぎないのは明瞭のこととしやう。從つて、これらの點から云ふならば、凡ゆる集團活動は集團人の社會的諸行爲の內に共通に含まれる一定の普遍的傾向に底礎附けられるものであつて、この樣な共通的傾向に從ひ綜合的に把握された社會的諸行爲が、とりも直さず集團活動の事實をなすと謂はなければならぬ。集團活動の本質的理解がこの點に存する。

併し乍ら、集團活動を本質的に底礎附けるものが、集團人の行爲にふくまれる如上の共通傾向であることに疑なしとするも、此所謂共通傾向の實質は抑々簡單なものではあり得ないであらう。すなはち共通傾向なるものには、一方において民族的性質・特徵といふやうな社會的行爲の或る屬性が問題となると共に、他方、社會的行爲に見出される方向・形式がとり入れられて居ることを看過す可きではない。前者が社會的行爲に於ける外形的な共通傾向であるとするならば、後者はそれに於ける實質的な共通傾向をなす。行爲の現實的主體は共に個々人に存するのであるが、前の場合は、方向・形式上何等一致する所のない無秩序の行爲群であるに對し、後者の場合は、行爲そのものに共一的な性質・特徵の見出される以上に一定の秩序が存し齊一の方向上の一致が成立つ。これが故に、吾々は先づ集團活動に外形的な屬性的統一形態たる種類と、實質的な方向上統一ある秩序的な種類とを區別すべきである。かくて、前者が本來人々の行爲の無秩序・分裂的形態である點から、之を外形的集團活動と名づくるならば、後者は明らかに秩序的・組織的形態をなすものであつて、前者との對照上、實質的集團活動と稱することを得やうと思ふ。集團活動における基礎的類型が、これら二つのものの對立によつて示されるのである。

集團活動の內容の吟味によつて、吾々の把握し得た外形的集團活動に對立する實質的集團活動について見るに、このものにおいては、要素となる社會的行爲に方向・形式上の統一あり、卽ち一定の秩序の存することが特質をなして居るが、吾々が一歩かくの如き方向乃至秩序の行爲主體性に關する分析に立入る時、吾々はなほ二つの大に異れる場合の存するのを氣付かない譯に行かないであらう。すなはち此場合に於いても、行爲の現實的主體は必ずや個々人であるに相違ないが、一つの場合として、意味的主體がなほ此個々人或は高々個々人身邊の部分的集團であるに對し、他の場合にあつては、行爲の意味的主體そのものが全體の集團的存在に迄擴張されて居ることがあるのである。前の

場合、行爲方向上の統一は唯單に個人主義的統一たるに反し、後の場合、その統一は全體主義的統一を具現してくる。ここに於いて吾々は實質的集團活動について、個人主體的種類と集團主體的形態とを區別す可き要請の下に立たざるを得ないこととなる。前者が行爲の個人主義的なる方向・形式の共一性に根ざす點から、之を齊一的集團活動と名づくるならば、後者は行爲が意味上に於ける集團主體性に方向づけられた所のものであつて、この點から全體的集團活動と稱することを適當としやう。[1] かくして、集團活動の基礎的類型は、さきの外形的集團活動を加へて三つに分たれるであらう。

註一　マッケンジーは全體的集團活動を Corporate action（團體活動）と呼ぶ（Mackenzie, Outlines of sociology, p. 50.）。彼が「動物群と雖も實にかくの如き統一的活動をなし得る」としたのは（Ibid., p. 50.）この全體的集團活動の内に、無意識的な慣習的集團活動の種類のふくまれ、そのものは動物界に於いてなほ生起の可能性あるを考へた故であつたであらう。

三　外形的集團活動

吾々は既に此外形的集團活動を以て、集團人各個の個人主義的行爲における性質・特徴上の共通性に從ひ、統一的に考へられる限りでの社會諸行爲なる所以を說く所があつたのであるが、消極的には、それに要素たる諸行爲が何等秩序を具現するに至らない分裂的なものであり、僅かにそれら諸行爲が呈示する外部的共通傾向に基いて統一視されるに止まる行爲群であるといふ事である。そこで例へば國振りを發揮する民族的社會過程や、地方氣質を流露しめる特定地域の社會生活や、又ローカル・カラー濃厚なる個々の都會的活動等々が、皆悉く外形的集團活動の例證をなすものでなければならない。この樣な諸多の引例よりするならば、凡ゆる外形的集團活動は事實上所謂全體的集團と見做される接觸集團特に共同生活體の實例に於いてのみ發見せられるかの如くであるが、事實は必しも然らず、接觸集團や共同生活體に對し部分的集團なりと認められる個々のゲマインシヤフト集團、ゲゼルシヤフト集團に於いても同じ種類の集團活動が驗證される。例へば家族的生活には、個々の家族固有の家風によつて統一された事實が存し、個々の組合活動に於いても亦特有の精神・特徴がそれを統一する點があり、プロレタリア階級の社會過程が全體としてブルヂョア階級のそれと對照を鮮明ならしめる如きは、就中著明なる事實と認めなければならないであらう。

ではあるが、外形的集團活動の事實が單に社會過程の外面的共通傾向に從つて統一形態視せられることは、かくの如き外面的共通傾向が、常に他集團の社會過程との對照・比較を俟つて始めて充分に認知され意識化される關係上、事實の内部的觀察そのものによつては、集團活動の事態を此外形的集團活動の現象に把捉し得ないといふのが自然の事となる。從つてスペンサーの如きは、外形的集團活動以上の實質的集團活動の存否如何を標準として選んだ彼の社會型理論を以て、此外形的集團活動の行はれる集團狀態を一般に產業型社會（The industrial type of society）の類型に歸屬して怪しまなかつたのである。[1] スペンサーによれば、產業型社會は個人主義的活動をその社會過程の特質として居る。然るに吾々の正しく見る所によれば、假令かくの如き個人主義的活動を特徴とする社會過程と雖も、多くの場合にあつて外面上共一的性質・特色を統一的に呈示することによつて、なほ且一種の集團活動性を容認せしめる點をふくんで居る。吾々と雖もスペンサーの產業型社會の總べての社會過程をあげて外形的集團活動なりと斷定することは、留保しなければならない所であるが、[2] 概して云へば、その多數の實例が現にそれを實現するものなることは、躊躇なく主張出來るのである。

他の一方において、近世無政府主義の書き出す理想的社會生活が、極端なる個人自由主義の實現形態たることは、同じく外形的集團活動に關して興味ある檢討を吾々に思ひ立たしめると云つてよいと信ずる。思ふに如何に無秩序・分裂的であつても、社會過程にして何等かの點で外形的集團活動たることを立證しないものは例外的事實をなして居る。[3] 此外形的集團活動のあらはれることは、無政府主義者と雖も敢へて否定せんと欲する者ではなかつたのである。無政府主義の主張する所はむしろ無秩序・分裂的社會過程を重視し實質的集團活動の否認そのものに集注されて居る。ここに於いて無政府主義の積極的要望を實際的に即ち現實に於いて充足し能ふであらう社會的生活形態は、類型上殆ど吾々が外形的集團活動と概念する所のものに一致するものでなくてはならぬ。[1] この意味の下に、吾々は外形的集團活動を見るに無政府主義原理に對應する集團活動なりとなすことを得ときである。例へば現代大都會の生活實狀が屢屢無政府主義的であると稱せられ、又刻下の人類の國際的棲息狀態が同じく無政府狀態の混沌性に比せられるのであるが、個々の大都市生活も他のものとの比較においては充分外形的集團活動を實現し、現狀の國際的混沌狀態も他の時代の人間棲息の事實に對照すれば、なほ特殊の性質・特徴に彩られる統一形態たるを具現する。

註1　H. Spencer, Principles of sociology, Vol. II, Part V. Ch. XVIII. 拙著、社會集團と社會階級、五三頁以下。

2　新集團の成立當初において、集團活動は假令共一的性質のものと雖も未だ成立せざるものが多い。ここにおいても亦、初期の植民部落がその例となる。

3　前註參照。なほその理由は外形的集團活動の成立條件の一般的存在と支配によるのであつて、この點については、第三章の各節をみよ。

4　私は無政府主義原理が實際上對應する社會生活の如何なるものなるかを類型的に論じつつある者であり、無政府主義の合理性況んやその理想上に於ける妥當性を云々するのではない。無政府主義そのものは殆んど自然的に成立つであらう實質的集團活動の不可避的なる事に關し認識不足であつて、この點より空想的たるを遺憾なく露出すると信ぜられる。

四　齊一的集團活動

外形的集團活動に對立する所の實質的集團活動は、集團人の個々の行爲に見出される秩序的・組織的な傾向に從つて統一化して考へられる行爲群であつて、外形的集團活動に於ける行爲の外面的共通傾向以上、その內面的な一致傾向によつて特質づけられて居る。外形的集團活動を以て性質上の統一活動であるといへば、これは方向上の統一活動と謂ひうることは既述の如くであつて、吾々は廣くそのものに於いて秩序性を見出したのである。かくの如き方向上の統一活動に當る實質的集團活動が、行爲者たる集團人の個々の立場において方向上の統一を具現するに至つたものが、個人主義的な齊一的集團活動の類型をなして居る。通例の組合・學校・教會內部の問題として、成員日常の行動は極めて順調にこの種の齊一的集團活動を實現しつつある。長年月の間同一個所に傳統的生活を送る內地の村落生活の如きも多分に其樣なものを現はすこと疑ひを容れない。所謂地域團體として村落以上の規模を以て生活する地方團體の內に又同樣のものを見るであらう。從つて、平靜なる民族的集團に展開する社會過程の如きも大規模なるこの例であつて、特に民族意識に對する刺戟の存せざるにも拘はらず、國民各自の爲す所のものが云はず語らずの內に一齊に秩序ある過程になつて行く微妙な關係が發見されるのである。極くスムースな集團活動がこれである。

齊一的集團活動は、定義的になほ個人主義的行爲より成立ち、而も一齊に一定の方向・形式を秩序的にあらはし示

す所のものであるから、集團人の主觀性に於いて積極的になす可き行爲の意味が殆ど自發化しつつある。吾々は僅かにその主觀性の內に、なす可からざる行爲の意味が消極的に對立・表象せられるに止ることを見出し得る許りである。[1] そして、それによつて各人の行爲の行爲が共一的な方向をあらはす一助となつて居る。ここに於いて、スペンサーが高度の實質的集團活動に立ち至らざる以前、若し何等かの集團活動の事實存するならば、それは社會統制的表現に於いて、人々に對しなす可き所のものを命ずるのではなく、むしろ彼等になす可からざる所のものを禁ずる點に現はれるとしたのは、卽ち齊一的集團活動に於けるこの消極的禁止の表象性を示唆したものであつたであらう。[2] 併し乍らこれはどこまでも、個人主義的意識中にふくまれる消極的禁止の表象たるに止るのであるから、吾々は何等當事者の行爲の意味のうちに個人的立場を止揚するやうな集團本位的全體主義の意味を認め難いとし、從つて、ここに適切なる意味の下に社會統制を云々す可きではないと信ずる。これ齊一的集團活動が同じく實質的集團活動の高度形態たる全體的集團活動と著しい對照をなす點であり、同時にかの外形的集團活動の狀態と相通ずる所あるを明らかに示唆して居る。[3]

さて、吾々は外形的集團活動が近世無政府主義の原理に對應する集團活動の形態なることを說いたのであつたが、ここに齊一的集團活動を論ずる場合、この類型の集團活動こそは所謂自由主義の原理を實現する種類であることを指摘したい。自由主義とは個々人の自由放任（Laissez-faire）の主張であつて、これは一見極端なる個人自由主義としての無政府主義と混同されるのであるが、自由主義がかくの如き極端自由主義と相通ずる主義・主張をなす所以は、實に個々人の自發性を尊重し、それに對する外部的拘束を否定する點に存して居る。併し乍ら、吾々はこれら兩者の間に存在する重大なる差異に對し決して盲目たる可きでないのであつて、差異點とは自由主義の場合に於いて、事柄が主觀的自由に制限されて居るといふことである。果して然らば、吾々の今論じつつある齊一的集團活動は、人々の主觀に於ける問題として殆ど自由に任意的に行爲を行ふものであつて、自覺上外部的拘束を感ぜざるものであるからして、自由主義の原理がよく實現されつつあるのを見る。而もここにも注意す可きは、その際個人的意味での秩序化が許容されつつあることであつて、積極的統一性がこれに內包されて居ることである。自由主義は個人的自由を主張する反面において、個人的自由より出發する所の、個人行爲の方向上の統一・平行を認容し、或る場合進んで之を歡迎・推奬する精神の下に、獨自の立場を保つものなのである。[4]

註1　所謂群集心理の現象は複雜なる現象群であるが、ギンスバークの正しく洞見したやうに、その主要部分が個々人の心理的性質の亢進にあることは確かであり（M. Ginsberg, Psychology of society, Ch. IX.）、その限りにおいて齊一的集團活動の亞種をなす。その際なす可からざる行爲の表象まで抹消するやうな心理的性質の亢進することは、やがて群集活動を支離滅裂に赴かしめる契機をなす所である。

2　スペンサーは「なす可からず」と云ふ命令が彼の所謂產業的社會型の特質であると見たのであるが、私は彼の產業的社會型そのものが類型學的に甚だ多くの夾雜要素をふくむこと、從つてこの「なす可からず」の命令そのものの如き、むしろ純然たる產業型の生活、卽ち私のいふ外形的集團活動以上の類型に歸屬すると考へる。この一事よりいふもスペンサー的社會型論は雜駁の誹りを免れ得ないであらう。

3　この點、私が外形的集團活動と高度の實質的集團活動たる全體的集團活動の中間類型として此齊一的集團活動をあげる理由を强めるものである。

4　自由放任の原則の下に於いて事實上なほ此種の社會拘束の行はることについてマンハイムの如きも既に充分之を察知しつ

つある（K. Mannheim, The crisis of culture, Sociological Review, Vol. XXVI, No. 2, p. 107.）。かくてクーリーが「自由とは規律の缺如をいふのではなく、むしろ低度の非合理的なものに對し、一層高度の合理的形式の使用を意味して居る」（Cooley, Social order, p. 396.）との言は味ふ可きものをふくむ。

五　全體的集團活動

吾々は先づ外形的集團活動の類型に對應的であるやうな實質的集團活動の第一形態として齊一的集團活動をあげたのであるが、これは外形的集團活動に於けるが如き性質上の統一活動とは異り、方向上の統一ある集團活動であり乍ら、個人主義的たるに止り所謂方向の平行があるのみ、この意味で一種の秩序が支配するに止まる種類であつた。然るに同樣の方向上の統一ある實質的集團活動には、方向の單なる平行以上に出でて、第二にこの方向を齊一的集團活動の場合におけるやうに個人的主體の多元性に分散せしめず、集團的主體の一元性に歸一せしめるもの少からず、その樣な場合として吾々は新に全體的集團活動の類型を認める。現實の公共諸團結、例へば慈善博愛團體或は國家・自治體等について見るならば、集團成員の行爲は一般に當該集團或は當該集團をふくむ背後の大きな集團本位の意味を以て行はれ、全體的集團活動の實現されるを發見しよう。家族生活に於いて、家族成員の行爲が概ね全體の立場をとつて行はれるのはその好例であるが、平時において民族活動が齊一的集團活動によつて特質づけられるも、對外的摩擦・戰爭等の發生を迎へてこれ迄萠芽を示すに止る集團本位性が、急激な發展をとげ、高度の全體的集團活動に移行する如きも、その顯著なる例たるを失はないであらう。[1]

全體的集團活動に至つて、集團活動は完全なる形において方向上の統一を實現してくるのであるが、これが爲めには、顯在意識的であれ或は潛在意識的であれ、集團的全體性が人々の個人的自我性に對し、異質的に對抗せしめられ、人々は集團本位の觀念とそれが爲めまさに如何なる行爲に出づ可きかについて外部的統制を受容して來る。そこでその異質的意識によつて、消極的になす可からざる行爲が表象されてあるのみならず、積極的になす可き所の行爲も亦齊しく感得されるを認められる。これスペンサーが、高度の集團活動であるとした所謂軍事的社會型特有の社會統制が、人々になす可からざるものを禁遏する態度に出づる許りでなく、なす可き所のものを指示するとなした所以であつて、スペンサーは畢竟、全體的集團活動の概念を以て彼の軍事的社會型を規定して居つたのである。[2] かくして、全體的集團活動は社會過程の現實的行動主體たる集團諸個人の主觀性の問題として最早や個人性が超克せしめられて居る。これ明らかに外形的集團活動の類型に鋭く對抗する本質的な點であり、又齊一的集團活動に對しても、部分的對立を示すものでなければならぬ。要するに此全體的集團活動の形態に於いて、吾々が最高度的集團活動の類型に接することは、反復縷述するを要しないことであらう。

かの外形的集團活動の事實が近世無政府主義原理に對應し、又齊一的集團活動の形態が所謂自由主義の主張に一致するが如く、今吾々が最高度の集團活動の類型としてあげる全體的集團活動が、又何等か社會生活運營の方針に一致するものではないかについて考察を繞らすことは興味あることでなければならぬ。而してこの問題に關する限り、吾吾は極めて容易に軍國主義、獨裁主義等々に示される統制主義原理がそれに照應する所以を發見するに至るであらう。全體的集團活動の場合に於いては、齊一的集團活動の際、人々の意識にふくまれる個人中心の觀念が、方向平行的な實質的集團活動を自然の歸結とするやうに、人々の意識に持ち來される集團本位の表象が方向統一性を實現するのであつて、これは所謂擧國一致の事實たる事を明瞭ならしめる。統制主義は表面上如何なる方向に於いても集團人の社

會過程を規制するかの如くであるが、[3] その實は決して然らず、集團中心・集團本位の觀點の下にその方向へ社會過程を制約せんと欲するものであつて、集團人がその意識において集團本位性の拘束を感じ、それによつて實質的集團活動の完成されるのを期待する。この關係において統制主義の原理が吾々のいふ全體的集團活動の形態に照應するのである。[4]

註1　齊一的集團活動が全體的集團活動に移行する關係は微妙であり、且又流動的である。私は集團活動の理想的類型を論じつつあるのであつて、現實に一つの形態から他の形態へと機微なる變化が行はれるのを否定する者ではないのである。なほ、組合・學校等々の集團生活においても、全體的集團活動の生起する餘地あることは、この種の集團活動を刺戟する要因に依存する所である。

2　Spencer, Principles, Vol. II, Part V, Ch. XVII. 拙著、社會集團と社會階級、五一頁以下。

3　私は統制主義と專制主義とを嚴に區別す可きであると考へる。專制主義は「强力の統治」であり、社會的には殆ど强力といふ環境の問題となるであらう。事實は高々「强力的支配現象」として考へられるのみ。之に反し統制主義は社會統制の主張であり社會的固有の問題に連關を失はない。統制主義と專制主義とを混同する見方は、形式を見て實質に徹せず、事實を社會學的理解を以て分析するに至らざるものであらう。

4　ここに集團活動の內容の吟味によつて、吾々の把握し得た全體的集團活動について見るに、これは行爲に連關する主體的意味が個々人或は個々人身邊の部分的集團に存せず、それに對立する全體の集團的存在にあるのが特長をなす。然し吾々がこの主體的全體性の集團活動に對する關係を分析するに進む時には、なほ二つの大に異る場合を發見せぬ譯には行かない。すなはち、此全體的集團活動においては、現實にその要素をなす社會的諸行爲を營む人々は、彼等の行爲を全體の集團的存在の爲めにするとの自覺を持つと推定されるかも知れないのであるが、事實は必しも然らず、人々のかかる自覺を超越し、而も實際上に於いては行爲が全體の集團的存在の爲め營まれること少くない。前の場合において主體的全體性は人々の顯在意識に表象されてあるが、後の場合にあつてその事は存しない。然し後の場合にあつても、意味上なほ主體的全體性が立證されるのは、これが人々の潛在意識において抱懷されて居るからの事でなくてはならぬ。ここに於いて吾々は、顯在意識的な全體的集團活動と潛在意識的なそれとを分ち、前者を政治的集團活動となし後者を慣習的集團活動となすことによつて、新に集團活動の類型の擴張を計らなければならない。顯在意識による全體的集團活動を政治的形態とし、潛在意識よりする同樣の集團活動を慣習的形態となすその命名の根據如何。これについては、全體的集團活動が主として社會統制に由來する事實を前提し、而して社會統制が慣習的に行はれる場合と政治的に行はれる場合とが對立する事柄を說かなければならぬ。別の機會に於いて私はこの事を詳述するであらうが、今は讀者が本篇第三章、第四節に於ける全體的集團活動の生起に關する敍述を參看せんことを求めるだけに止めたいと思ふ。

六　事實解釋の問題

集團內部に展開せしめられる社會過程が統一的な一定の容貌の下に、集團活動として呈示せられることについて、吾々は今その實質を分析し來つたのであるが、それによれば總べてのかくの如き事實・現象は一言にして社會集團を限界として成立つて居る統一的社會過程の全容であるが、この所謂統一性が如何なる點に於いて現示されるかといふに基いて幾多の互に相異る現象の種類を內包しつつある。單に個々の社會過程はそれぞれの存在において互に相異なる意味のものであつて、本來個別的な事實であるにも拘はらず共通的性質に從つて集團活動たること外形的集團活動の類型の如くである場合と、むしろ、當該社會過程が悉く相等しい方向上の一致を來しこの特性上に於いて固有の齊一的集團活動たる場合と、更にこの一致的方向を中心として集團活動たること全體的集團活動の類型の如きである場合とが分たれることを見た。吾々は一應これを以て集團活動の把握であると考へうるので

ある。少くとも事實の形態的解釋に關する限り、第一次的把握がここに成立つたと見てよからうと思ふ。然るに集團活動の事實は、かかる形態論的觀點以外、なほ省察す可き若干の點をふくむ。これを以下に說明する所がなければならぬ。

集團活動が或る場合外形的類型のものとして所謂性質上に於ける統一的社會過程をなし、又或る場合實質的兩類型のいづれかのものとして方向上に於ける統一的なそれをあらはす事實に立脚し、吾々は此等集團活動の現象に對し次のやうな總體的解釋を與へることを得るであらうと思惟する。それはすなはち此種の形態を採るところの社會過程を最早やその要素たる社會的諸行爲や或は又社會的諸行爲から組立てられる環節的諸形態として見るのではなく、かかる分析的乃至解剖的方針を拋擲し、事實に對して統一・綜合的な見方を妥當せしめるといふ新方式である。換言すれば集團活動現象を現象それ自體の性質に從ひ認識上獨自化することと是れである。この方式の下において集團活動は特定集團獨自の生活事實、活動現象たる意味において見直される。かの外形的集團活動は特定集團の特有なる生活事實であり、實質的集團活動は方向上統一ある活動現象をなす。實質的集團活動の內においても、齊一的類型は當該集團の個人主義的方向統一の活動に外ならないが、全體的類型に至つて、方向上の統一が集團本位的に完全なる段階に持ち來されると見做されるのである。吾々はかかる新方式の集團活動の解釋によつて、現實各方面に營まれる社會過程を極めて簡單に見通し得ると共に、歷史的諸事象の如きも亦優れた理解によつて到達されること疑ひないと信ずるのである。

集團活動に關するこの新方式の解釋こそは、事實に對する形態論的解釋によつて支持を受く可き樣な現象の要約的理解に外ならないかも知れない。確かにそれが事柄の眞相をなすものであらうと思ふ。併し乍らこの要約的理解に從つて、吾々には事實の取扱に關して多大の便宜が用意されるを忘る可きではないと思はれる。常識上において又歷史學上において、多くの社會過程を何等かの集團獨自の生活事實・活動現象と前提しつつ考察を下すことの如き、如上の旨を裏書して餘りあるものであらう。吾々は今問題となつて居る新方式の解釋について、之を集團活動の事實に關する具體的研究の前提たり得る理解であるとし、この意味に從ひ、ここに集團活動の事實を現實社會學的解釋として許容す可き義務ありと信ずる者である。ではあるが顧つて思ふに、かくの如き具體的研究に前提たり得るやうな現實社會學的解釋は、さきの形態論的解釋の結果基礎付けられるものであつて、而も形態論的に集團活動の事實が集團活動として、又個々の類型として是認されるが爲めには、それらのものをしてしかあらしむ可きやうな事實的連關の存在が最も重要であつて、如何なる場合に於いてもその事實的連關を看過す可きではないであらう。この注意の下に、吾々は事實の事實的連關を形態論的に吟味すると共に、その生起の條件に迄沈潛して考察する用意を以て極めて重要なりと考ふる者である。

註一　總べての社會過程はその背景をなす集團を座位として集團活動視されうるであらうが、これは可能性に外ならず、この可能性が現實化する爲めには、必ずや一定の條件を要し、一定の條件の下に事實上に於いて集團活動を具現しなければならぬ。形態論的集團活動の立證が「現實社會學的解釋」を可能にし、形態論的集團活動の立證は、發生論的條件が現實に作用することから事實的に立證される所がなければならないのである。

全體的集團活動が集團主體的作用として存することは、ここに端なくも、個人及びその行爲以外に、社會學的觀點から集團とその統一活動が、恰も個人及びその行爲に比せらる可き樣な、事實現象をなすことを認めしめる。吾々は社會事象が個人間

の關係的事實・現象なる旨を說き、而して社會集團・社會過程等々の問題を、その考察上常に個々人間の關結或は個々人間の關係作用であるとなし來つたのであるが、若し、社會集團にして如上の全體的活動性によつて、餘の集團と恰も個人間におけるやうな關結關係や又關係現象を具現するに至るならば、事柄が個人間の問題たることを超克し、諸個人より成る集團的單位の問題であるにも拘はらず、吾々は本質上同一の事象が繰り返へして現出せしめられる理由に基づき高次の社會事象をここに是認しなければならぬ。全體的集團活動の支配する限り、集團は個人と同一視されて差支ない。總べての社會事象は、別の機會に私が詳述するであらう社會形象をも込めて、集團間に於いても成立ちうるを事實とする。社會事象は單に個人間の關係事象に止らざることは、これ私がこれを人間的關係事象として規定せる所以でもあつたのである(拙著、社會學原論、第三篇、特にその第一章)。

七　諸型集團活動の混合

以上說明する所により、集團活動に各種類型の見出されること明らかとなつたが抑々、それら諸類型を通じて集團活動は社會過程それ自體の統一的表現形式たることに存し、それと混同される處れのある集團的社會過程が現はし出す何等かの屬性・特徵にあるのではないのであるから、その實態・內容はどこまでも社會過程に存する。社會過程が集團範圍內に特定の性質乃至方向を帶びてあらはれるその樣相だけを意味する所の性質乃至方向と稱する屬性・特徵が問題なのではなく、かくの如き屬性・特徵に從つて統一的に把握される社會過程が題目をなすのである。[1] 仍て中心事實をなす集團的社會過程は假令全く同一のものであるにしても、吾々がそれの有する如何なる屬性・特徵に注意するかに從つて、或は單純な外形的集團活動を認め、或はその齊一的類型を見出し、或はそれ以上全體的類型を立證し得可きである。題材となつて居る社會過程に何等事實をじか認めしめる性質的統一性乃至方向的統一性がないならば、勿論問題は存しないであらう。又、性質的統一性獨り存して、方向的統一性を缺く場合や、或種の方向的統一性のみを殘し、爾余の統一的特徵・屬性の發見されない場合も亦〻疑問の成立つ餘地がないが、問題は、二種類以上の統一的特徵・屬性の並存的に發見される場合にある。

事實、二種類以上の統一的特徵・屬性が社會過程に齊しく具備され、集團活動の現象を現して居ることは、一般的な事柄であると稱してよい。否、現實多數の集團的社會過程に於いては、性質上の統一性が明瞭に見出されると同時に、成員各自の生活上互に平行的であるやうな行爲が繰り返され、又その行爲は潛在的に或は顯著なる形の下に集團中心性を內在せしめつつあると謂つてよい。一民族の生活が固有の民族的氣質を流露する許りでなく、國民各個に於ける問題として己がじしその軌を一にする動作を演じ、而も亦一面に於いて間接的ではあるが國家・社會に奉仕する點に一致する如きその實例でなければならぬ。概して外形的集團活動といふ低度の類型は、一層高度の他の類型を同時に具現することなくして獨立に存在しうるが、より進んだ齊一的集團活動に於いてはこの外形的類型を兼備し、全體的集團活動に至つては、同時に齊一的類型や外形的類型等、一段下位の集團活動性を自己の內に併せ包藏することが頗る多いのである。これには決して例外なきに非るものであるが、[2] この事態は吾々をして集團活動の問題について、理論的概念と現實的事實との間に存する或る距離について、とくと注意と警戒とを意識させるものでなければならぬ。[3]

從つて、集團活動の事實に關し措定された諸類型は、高度に抽象的であると稱し差支ないことである。理論上において、外形的集團活動、齊一的集團活動又全體的集團活動等の諸類型が概念せられ、夫々相對立するやうな現象態をなし乍ら、實際上、それら諸類型は一にして他を兼ね、彼此相通ずるといふのが事實である。それにも拘はらず、現

の複合性について分析を進める場合、吾々に於いて不可避なるは、かくの如き事實に含まれる內部の異質的諸要素について個別的特有の概念を規定し、これを利用することにあるであらう。蓋し、事實がこの方法によつて解釋・說明の手懸りを與へられ、理解の容易ならしめられることとあるによるのである。併し乍ら、翻つて思へば、何故に集團活動の事實に限つて、かくの如き複合性が存するのであらうか。この疑問に答ふるものは、集團活動そのものの依つて成立つ存立條件であらねばならぬと推定す可きである。事實上、集團活動を集團活動たらしめるそれの發生諸條件は、集團活動の各種類型に對し同時的に作用すること多いのであつて、少くとも、諸條件は共存・共在的であるもの多數を占めるといふのが實際である。ここに於いて、吾々は一轉して、集團活動の生起の問題を論じつつ、その點を闡明して行きたいと欲する。

註1、私はここに活動性を取扱ふのであるから、活動性を彩る何等かのものをそれ自體に於いて考察するのでない。後述するやうに、集團活動は自然環境や文化環境等から制約せられるが、文化環境或は文化形象はこれを支持する集團毎に、固有の特性を有しつつ社會過程を彩り集團活動を可能にする。文化形象それ自體の特性を私は社會性と呼ぶが(國民性?)、社會性は、よしそれが排他的に集團活動に呈露され、集團活動がこれによつて特徴づけられる際に於いても、集團活動と異ることは自明であらう。この如き場合、若し集團活動を以て、社會性と同視せんか、自然環境の特殊性を社會的な集團活動と同一視せねばならない矛盾に陷らう。一體文化形象が社會過程からはなれた別個の事實であるといふ認識が不充分になされること屢々であつてそのやうな場合に於いて如上の混同と混亂が生ずるのである。これについては、なほ後に述べるであらう(第三章、第六、七節)。

2　群集は一時的集合であり、環境的制約なく、又異質的と呼ばれるやうに各種雜多の人々の混合であつて、外形的集團活動は誠に微弱のやうであるが然し、外部の刺戟により、或は又內部的醱酵によつて、群集心理の現象を激成し能ふのであつて、此群集心理の現象は既にギンスベークが之を各個人に於ける軌を齊しうする感情・行動の共通的發揚と見たやうに、齊一的集團活動であり(Ginsberg, Psychology of society, Ch. IX.)、又之に加ふるに、集團感情の特殊形態をとる社會的自我意識の統制を加味して成る全體的集團活動たることを立證する。集團內部が如何に無秩序であつても、外界よりする脅威・强敵の出現は、生活の組織化を容易に誘發しやう。此等の例はこの場合例外をなすのである。

3　此事は社會集團論の各部分において、又社會過程の諸要素についても云へることであるが、特に此場合事柄が峻別を要する關係上、これを注意した次第である。

第三章　集團活動の生起と結果

一　集團的制約

集團活動の實狀を略ぼ明らかならしめた以上、吾々は進んで集團活動が如何にして生起したるかといふその發生條件に關する攻究に出でなければならない。集團活動の內容に若干の類型的差別の存することは、吾々がその實狀を述べた際に擧示した所であつたが、類型的差別相の如きも必ずや集團活動の發生條件の如何に拘はるものであるからして、この點よりいつて事實そのものの徹底的理解がその發生問題に繫ることを思はなければならないであらう。[1] かくて吾々は集團活動生起の條件を異常の興味を以て探索するに至るのであるが、この際吾々は總べて集團活動の事實が動的社會事象として社會過程に外ならざること、而して凡ゆる社會過程が直證的要求において、社會的行爲を本として成立つ以外のものでないことを前提し得るのであつて、事柄を社會的行爲から出發して構

成的說明を企てようとする。社會的行爲といふ社會過程の分析的要素は果して如何なる條件の下に於いて集團的統一性をあらはし來るであらうかがここに問題となる。然るに之を說明するものは、集團的制約と環境的制約と社會統制的制約等であつて、以下、一々これを擧示說明したいのである。[1]

抑々集團活動の事實は社會過程の集團內部における統一形態に外ならないのであるが、總べて社會過程が社會集團を地盤としその範域上に展開する作用現象であつて見れば、かくの如き集團內の諸現象が、集團範域を限界として統一形態をあらはすことが集團性そのものと關係するところがあるであらうことは、想像に難からざる問題である。かくてこの點の反省こそは、集團活動の事實の悉くを以つて集團的事實に由來するを推定せしめるほどであるが、吾々は同時に他の諸事情がまた事柄を制約することの多いのを熟知する者であるから、本來、集團性は單に部分的に集團活動を條件づけるものと見なければならぬ。[3] 社會集團はその構成の差別あるに應じて、それを地盤とし範域として生起する社會過程に對し全體として特殊傾向を附與し、これによつて統一性をあらはす集團活動を制約する程度である。

社會集團が個々にその構成上の差別を有することは、卽ち集團的構成諸原理、換言すれば人々の團結狀態の相異ることによる。集團每に、集團人の相互的接觸の有樣に差異あり、ゲマインシヤフト的結合に親疎の區別存し、且又、ゲゼルシヤフト的結合に於いても實質上の相違が顯著であつて、この事あるに從つて特定集團內の社會過程は一般的に特色ある傾向を規制され附與される。例へば直接面接する密接なる集合形態に於いて行はれる社會的行爲は、稀薄なる交通機關を通して營まれる世界的共同生活體に於ける社交生活よりも、全體として頻數と强度に於いて遙かに勝る。これ吾々が以前接觸的社會過程の形式的問題として取りあげた所のものであつた。[4] ゲイマンシヤフト的に集團人が感情上相融和する場合とても然り、古代家族に於けるやうに全人格的擴がりに於いて一體感を以てなされる場合は現代職業團體に認められる如く部分的事項に基づき淡い共屬感情を抱懷する場合と異り、社會過程には集團主體性が立證され、親和生活が深刻に具現されるのに、後者にあつては集團中心性は喪失し、親和的性質が全面的に後退するのである。更にゲゼルシヤフト的結合について見るならば、かくの如き集團人の協同・提携の性質が利己的交換或は利殖にあるか、或は又公共的經營に存するか等々の各種多樣の內容がそこに現出される社會過程の傾向を總體的に特質づける。これらの點も亦吾々がゲマインシヤフト的結合、ゲゼルシヤフト的結合の社會過程に對する關係として既に擧示せる所であつた。[5] 要するに社會集團の構成諸原理の狀況の差異が個々の場合に社會過程を集團活動に迄制約する所であつて、一般に集團構成諸原理は性質上に於ける統一化に役立ち、偶々ゲマインシヤフト的結合の一體感的種類とゲゼルシヤフト的結合の公共的形態において、集團主體的統一化があり得ることを理解されるのである。[5]

註1　前章、第七節を見よ。

2　エルウッドは集團活動の生起に關し「社會的統一及び集團活動」の題目下に多少の考察を加へたのであるが、不充分なる點頗る多い。讀者は試みにこれを私の取扱と對照されたい（Ellwood, Psychology of human society, Ch. V.）。

3　集團活動は集團を限界とする特殊傾向の統一的社會過程の總括であつて、若し集團を特に規定する事情ありとすれば、又集團によつて特に規定される關係ありとすれば、それらのものは矢張り集團活動の生起に對し何等か關與し得可き規制的要素たりうるのである。私がやがて環境條件をあげ、又社會統制の條件をあげるのはそれらの各々に精密な一致に於いてではないが略ぼ該當し、兩者を引くるめていふなら正確にそれに對應するものである。

4　本書、第一部、第二篇、第三章、第六節。

5　同上第三篇、第三章、第六節及び第四篇、第三章、第六節。ゲマインシャフト、ゲゼルシャフトの內部の諸類型に從つて、それは又當然特殊的な規定をうける筈である。デュルケムは人口の動學的密度を以て社會過程の根源的な規定力をなすと考へたが（Durkheim, Règles, Ch. V.）、これによつて彼は集團人間の相互的接觸の狀況とゲマインシャフト的結合の親疎とを問題として居つた（夫々、Règles, pp. 140-1; 139-40.）。彼は密度を云々するも、本來密度が絶對に說明力のないことは彼も亦認める所であつて（p. 142.）、問題の眞相は正に團結性に存する。それ故に、彼が所謂社會形態學の考察に於いて、暗に相互的接觸とゲマインシャフト的結合をとり上げつつ、ゲゼルシャフト的結合を全く閑却遺漏したのは重大なる缺陷と目す可きである。マクス・エーバーは特にゲゼルシャフト的結合によつて規制される社會的行爲を「團體行爲」（Verbandshandeln）と呼ぶ。私は此「團體行爲」の事實が集團活動の一要因をなすことを認める者であるが、エーバーが、更にこの團體行爲に能動性を持つた Verwaltungsstab の行爲と之に對し受動的な、それによつて率ゐられる Verbandsmitglieder の行爲のふくまれるのを認めた所以は（Weber, W. u. G. S. 26.）、ゲゼルシャフト的結合（或はこの場合、ゲゼルシャフト的結合によつて底礎附けられた團結）の當事者間の個々的行爲の種類をいへるものと理解さる可きのみ。ゲゼルシャフト的結合は契約的結合たる限り同時に契約內容を文化形象化するであらうが、文化形象としてそれは時に低度の存在にすぎない點より今その制約を集團的制約と見て、文化環境的制約と見ないのである。

6　而も、一體感的ゲマインシャフトの結合により多くの「慣習的集團活動」が、又公共的ゲゼルシャフトの結合によつてすべての「政治的集團活動」が規制されることを見逃し難いこととする。

マクドウガルが群集――私刑群集――組織的集團の順で「集團（活動！）の組織性」あらはれるとしたのは、組織的集團の觀念を以てゲゼルシャフト的集團を理解する節あり（蓋し彼は Common purpose の存在・明瞭化の順位をここにいふからである）集團結合性の集團活動に對する關係を示唆した點がある（W. MacDougall, Group mind, p. 48.）。

二　環境的制約

社會過程がそれの展開する地盤・範域をなす所の集團そのものの團結狀態により、一般に集團活動たるやうに制約られる關係を考察した上に於いて、吾々は集團活動の事實が人間社會的行爲に對する周圍の環境方面から規制せられる所以をあげなければならぬ。社會過程は集團的結合性の態樣によつて直接的に統一的傾向を具現するの外、又環境の影響を被つて間接的に統一的樣相を呈示して來るからである。かかる意味に於いて環境的條件となるものの第一は、云ふ迄もなく外的自然環境であつて、そこに地理、事物、生物等の諸存在が問題となる。地理の觀念は社會集團の存立する大地の實狀であるが、その一部として或はその表面に幾多の事物と生物とが見出される。それらの總べては、要するに集團外部の物理的自然界並に生物的自然界以外のものではないのであるが、此種の外的自然環境の諸存在が集團人に向つて全體的に對立し、彼等に等しく働きかけ、彼等の行爲を影響する所に、人々の社會的行爲は此等のものに對する適應關係をあらはし來ることが必然的であつて、共一的特性を呈示せざるを得ないことになつて、この結果、外形的集團活動が呈示される。この種の制約は、生產技術、經濟現象の方面に於いて最初に且又殊更顯著にあらはれるのであるが、間接的には、それ以外の方面における諸過程に於いても同じく一定の特性をもたらさずには居ない。かくして例へば、山村の經濟生活は平坦地方のそれと趣きを異にするものであり、エスキモー部落の棲息狀況は熱帶土人のそれと異り、漁村の社會過程があらゆる點に於いて農村社會生活と著しいコントラストを示すこととなる。[2]

外的自然環境に次いで第二に指摘す可きは內的自然環境の條件である。吾々がここに外的自然環境に對し特に內的自然環境と稱するものは、集團構成に參加する人々の肉體・心理兩方面の自然的所與性であつて、ゴルトシャイトが

之を人類と同視したやうに、人々の自然的性質・傾向たる人種的事項はその主たる內容であるが、[3] かかる基本的差別のみならず、他の一方においては、性別・年齢別或は優生學的觀點からする人口種類（人口階級、社會的部類）を取入れ、且又、人口數量をもあはせ含ましめなければならない。[4] 集團人にして人種・人口的性質を等しからしむるならば、彼等の關心と行爲とは共一的特色をあらはし、又行爲が社會的行爲としてそのやうな特色ある關心・行爲の人々に向つて行はるる事により、益々明瞭な統一的傾向を示す。ゲルマン民族の不羈獨立の活動やラテン國民の事大的退嬰の生活がその一例であり、又アテネ社會に藝術的生活頓に興隆し、ローマに於いて然らざりし事實の如きも他の著しい例であらう。[5] 然るに、集團內部の人々はかかる特質人として個々の場合一定の人數に於いて行爲するのであるから、その大小・數量に從ひ、人口の規定が現はれて來なければならぬ。事實、人口の數量はそこに行はれる社會過程の形式的規模の大小・程度を比例的に決定する。人口數百を數へるにすぎない田舍町と、三百萬、五百萬に及ぶ大都會とは、その經濟生活において政治活動において遙かに桁違ひのものであることを引例するならば、事柄は大凡明白のことであらうと信ずる。[6]

さて吾々は社會過程に對する自然諸環境の集團活動的規定を述べ來つたのであるが、この問題に就いて人間社會過程の「自然征服」の傾向をその逆の事實と見做し、自然環境的規定を幾分割引して考ふ可き理由が存する。人間社會生活は漸次に自然的規定を離脫して行くこと明らかである。この事は就中、對物的行爲以外の人間過程に關して然りであると認められる。ではあるが翻つて考ふ可きは、所謂人類の「自然征服」も事實上、自然的條件に巧に適應して行く事實に外ならないことである。人は自然條件に適應するに非れば之を征服し得る者に非ず、自然征服とは自然的環境諸條件に順應することにある。此點から云つて、高度の人類生活が自然離脫的であるのは、實はそれが自然體現的であるにすぎない。一見自然離脫的生活であると見あやまられる高度の人類生活と雖も、自然環境の諸制約は反つて社會過程の內部に潛入しつつあり、これが社會過程の內部に潛入しつつある結果、自然環境の制約がよく實現されて居るものに等しいのであつて、吾々はこの點から、自然環境的制約を拋棄し得ざる立場に置かれるのである。[7]

註1　バーナード（L. L. Bernard）は社會の環境を論じて、先づ自然環境をあげ、これに、宇宙・土地・氣候・無機的資源等より構成される環境卽ち「自然的力學的現象」を Le milieu inorganique とし、之を微有機體・寄生物・昆蟲・植物・獸類等の構成する環境卽ち「生物的現象」Le milieu organique に對立せしめ、これら二種類を分つた（Revue de l'Institut de Sociologie, 1930, No. 1, pp. 224 ff.）。外的自然環境は Circumfusa（外圍）であり、地形（大陸・海岸・島嶼・山地等）、地質（肥沃・有用鑛物の質及量等）、地位（他集團との遠近、その他）、氣候（寒暑・乾濕・晴雨・風雪等）、動植物（人類の敵として、生活資料、伴侶として）、災害（その程度頻數に應じ）の狀況等々を主たる內容とする。從來地理學的社會學と稱せられた研究によつて、獨り社會過程のみならず、總べての社會事象をこの方面より說明解釋する見方の採られたことは著明なる事柄であつた（J. Bruhnes La géographie humaine, 3. éd. 3 vols; P. V. de la Blanche, Principes de géographie humaine; J. Bruhnes et C. Vallaux, La géographie de l'histoire, 2. éd; S. Passarge, Grundzüge der gesetzmässigen Charakterzügen der Völker; Kjellén, Der staat als Lebensform. 等々。拙著、社會學原論、一〇五頁以下參照）。

2　外的自然環境の社會過程に及ぼす制約について、ギディングスの叙述は、今日と雖も、なほ一般に役立つものがあらう（Giddings, Principles, Book II, Ch. 1.）。而して外部の他集團をふくむ外的自然環境の社會生活に及ぼす影響關係の研究はかくの如く重要であるから、ボールドキンはそのやうな研究に名づけて曾て Sociionomics（社會環境學）と稱したことがある（Baldwin, Social and ethical interpretations in mental development, p. 484）。フールギッチ又之を物的・地理的影響と

して重視する (Hurwicz, Seelen der Völker, II, 3. Kap.)。マクドウガルは、外的自然環境が共一的集團活動を民族集團に對して規定する所に所謂 Race making period なる時期を構想した (MacDougall, The group mind, Ch. XV-XVII.)。

3 「內的環境」(Das innere Milieu) とはゴルトシャイトの術語であつたが、彼はこれに於いて肉體の遺傳質に關する問題を考へた (R. Goldscheid, Höherentwicklung und Menschenökonomie, I, S. 286 folg.)。かかるものとして內的自然環境は、エルウッドの指摘する生物的條件 (Ellwood, Psychology of society, p. 66.) 乃至フールギッチ謂ふ所の心理・生理的民族型 (Psycho-physischer Volkstypus) と殆ど一致するであらう (Hurwicz, Seelen der Völker, 4. Kap.)。

歷史的に白人種黃色人種は高度の社會生活を營む能力に富み、黑人種赤色人種はその逆である。例へば白人種は理性的且鈍重なるも、亞弗利加黑人種は感情的且輕薄の嫌がある。白人種間にあつても北方人種 (Homo Europaeus) と中部人種 (H. Alpinus) と南方人種 (H. Mediterraneus) は互に異る。例へば北方人種は努力的且一徹なるに比し、南方人種に及ぶに從ひ、天才的且移り氣となる。北方人種は歷史上にも他者に比較して精神的作業の點にすぐれたのである。人種の純血は安定的效果を與ふるも、生活の硬化を來す虞あり、接近せる人種の混血は比較的に優良な新人種を作り、而もあまり異つた人種間の混血に至つては(例、白黑混血兒(ミュラット)人種素質の劣惡化を伴ふ如し (W. MacDougall, Group mind, p. 242, etc.)。生物的方面の人種的特性は心理的方面よりも一層確認に容易であらう。然し、社會事象に對する條件としては、確認に困難なる心理的特性が反つて重要視せらる可きものである。

4 人口種類についてギディングスは "Population Classes" と呼んで居つた (Giddings, op. cit., pp. 124 ff.; ibid., Studies, pp. 151 ff.)。

5 社會過程に對するこの人種的規定存することにより、人種の改良よりする社會改造を思ひ立てるものが優生學運動であつたのである(拙著、社會學原論、一〇九頁)。但しデュルケムが此種の人種的說明を以て淺薄であるとし、事實は反つて文化的環境(彼は集團表象と稱す)から理解されるとしたやうに (Durkheim, Règles, pp. 135 ff.)、一義的に人種的說明を採用して他を顧みないのは行き過ぎである。吾々は唯人種的條件も亦一の制約をなすを認めんと欲するのみ。

6 人口の社會事象殊に經濟現象に對する關係についてはモーニエ之を概說す (R. Maunier, L'économie politique et la sociologie, pp. 64 ff.)。人口數の社會過程に及ぼす影響は、既に群集心理學上、密度の問題と相連關して考察された。ワラスに至つて一定の人口數が群集のみならず民族集團の存在に不可缺であるとの見解迄生じた (G. Wallas, Our social heritage, pp. 55, 77.)。併し乍ら群集心理的現象が個人心理間の强烈な相互刺戟關係に由來する限り、これは相互的接觸に隨伴する心理學的事實に過ぎず、人口數多きことによつて事實が顯著にあらはれることこそ人口的規定である。この例を以て又社會過程に對する相互的接觸といふ團結原理の規定と人口數量の規定とを峻別す可き理由が與へられる。デュルケムが所謂動學的密度以外、人口の容量 (Volume) なるものを彼の社會形態學の一要件としてあげたのには理由がある(特に彼の「分業論」の研究)併し乍ら人口數をあげて彼は何故他の環境諸條件を閑却したのであらうか。この疑問こそデュルケム形態學の缺陷に思を致さしめる有力な手懸りとなる。かかる事柄に連關して人口の同質・異質といふことが問題とされること屢々である (現にデュルケムの如き、ブーグレの如き人口の質的組立を重視し、高田博士も亦その轍をふんだ)。併し乍ら人口の同質・異質といふことは、決して實質的制約を社會過程に與へうべきものではない。同質は間接的にゲマインシャフト的結合を決定し (但しこれも排他的意義はない)、又異質はゲゼルシャフト的結合を決定する (而も又一義的連絡は缺ける) かも知れないし、或は集團內に生起する文化形象の性質に形式的な差異を與へるかも知れないのであるが、これは高々間接的形式的な問題であり、毫も直接的・具體的連關をなさぬ。人口の同質・異質問題はそれこそ社會學に於ける提はれたる自然科學的誤解の所產に外ならずと斷定してよい所のものである。人口の問題について、普通に容量、密度、構成要素(性別、年齡別、職業別)、配置狀態(都市集中と村落の稀薄)、動態(出生、死亡、增減、移動)等をあげるが、上述せる所からして、人口數(卽容量)以外のものはすべて別個の題目なるを明かにするであらう。

7 環境として一集團に對する外部の他集團或は外部の個人(例へばマクス・エーベー的に云つて、團體の他律を規定する外部的存在者、同じくそれの統率者、他選を決定する外部的存在者等々)が問題となるは疑ひを要せざることである(デュルケムも亦

外社會の問題をかかる場合考察に加へた。Durkheim, Règles.)。然し、此種の特殊なる人間的環境は、一般的に云つて當該集團の結合性を通じ(これ集團的制約である)、又集團內に存立する文化形象(例へば他律的制度！食堂の禮儀！)による環境的制約により、或は又更に對外關係から底礎附けられる集團內の社會統制（黨派的抗爭よりする集團的緊張！これ統制的制約である）を通して、夫々作用を及ぼすこと確かであつて、それ以外のものは純然たる自然環境的制約に屬するのであるから、私は特にこれを數へることを要しないものと信ずる。

オイレンブルクは自然の社會に對する三つの關係として

一、空間の問題

二、技術の問題

三、生理・心理の問題

をあげたのであるが(F. Eulenburg, Gesellschaft und Natur, S. 23-24.)、吾々が之を批判するならば、㈠は自然の集團的接觸原理に對する關係、㈡は外部的環境に關する問題、㈢は內部的環境に關する問題以外のものでないことを察知するに難くないのである。ストルチンベルクはその社會心理學・心理社會學觀(H. L. Stoltenberg, Sozialpsychologie, 2 Bde.)、並に心理・精神・集團の對立・交涉觀(Ibid., Seele, Geist und Gruppe, Schmollers Jahrbuch, 53. Jg. H. 3.)等において自然と心理狀態の社會過程に及ぼす影響を方式附けんとした。そこにおいては內・外自然環境の社會事象に及ぼす效果が範疇化されたのであるが、社會事象が抑々單一的現象でないことは、彼の方式化を更に分析的に論ぜねばならぬことを敎へる。そして自然環境よりする集團活動への效果はその一節をなす事實となるのである。

三　つづき　社會集團內部に行はれる社會過程が自然的環境を等しくすることにより、全般的に一樣の性質に彩られ、その結果集團活動特に外形的集團活動として見出されること如上の如きものがある。從つて自然科學的社會學の諸學說がこの方面の環境を說明原理としてとり入れ、社會過程の解釋を試みたことはそれだけの意味で根據を持つて居つたのである。[1] ではあるが、吾々が社會過程に對し環境的條件をとりあぐる場合に於いて、啻に自然主義的眼光の下に、環境の總べてを自然的所與性にのみ局限するやうなことともなるならば、ここに許す可からざる認識不足に陷るものであらう。元來人間は自然界の內に生れ、自然環境內に棲息すると同時に、一般に文化的世界の內に生活し、所謂文化的雰圍氣を別個の重大なる環境となしつつある。之が故に、環境的條件を云々する場合に於いて、自然環境と共に今一つの環境である文化環境を遺忘するを許されない。事實、吾々が自然環境の外に、最も重要なる環境的條件として新に指摘しなければならないのがこの文化環境であつて、此ものは自然環境よりも遙かに强く社會過程を集團的に統一化する作用をあらはし、かの齊一的集團活動を規定する。文化環境とは畢竟集團人が之を作成し支持しつつある所の社會制度、風俗慣習、イデオロギー等の文化諸形象であるが、文化形象の總べては社會的遺產乃至客觀精神と呼ばれる集團人の全く特別な環境的條件をなすのである。

自然環境に對する第二の文化環境は或は社會的雰圍氣、社會的遺產、又客觀精神等々と呼ばれるが、その實質は社會制度、風俗慣習、イデオロギーの種類であり、文化的構成物卽ち文化諸形象以外のものではない。吾々はかくの如き文化形象そのものが人間關係的一事實に當る點からこれを社會的構成物の意義を以て社會形象と槪念するのであるが、その根據は社會制度、風俗慣習、イデオロギーの總べてが、社會過程の內より生成せられ、社會過程に對し標準的雛型として存立する連關故のことである。[2] 文化形象がその本質上、社會過程の標準的雛型なることは、卽ちそれが個々人の心理と行爲とに對する異質的・客觀的存在物であるを明らかならしめ、以て環境的一存在たることを立證するものである。それ許りではない。文化形象は本來社會過程の標準的雛型なのであるからして、個々人の營む社會的

行爲を規制する力を備へる拘束的環境でもあるのである。デュルケムが文化形象を「集團表象」の術語の下に概念したのは著明なる事實であるが、彼の如きは拘束性を以てその最大の特性に擬へた程である。このデュルケム的拘束性が文化形象に容認せられる所以こそは、文化形象が社會過程に對する環境として、積極的に之を制約して行く事實であつて、社會過程の集團活動化の問題に關し、到底このものを閑却し得ざるを教へるものとなるのである。

社會集團にして文化形象を生成し內在せしめることは、集團が多少とも時間的繼續をなし、その內部において社會過程が繰り返して行はるる時、殆ど必然的結果であると云つてよい。推しなべての社會集團がかくの如くしてその範域に文化環境を內包することであるから、そして此文化環境は拘束性を以てそこに展開する社會諸過程を規制するのであるから、社會諸過程は如何なる場合に於いてもその制約の下に特有の傾向・性質によつて染め上げられる。例へば吾々日本人の生活過程は、日本文化の特異的存在により、民族的に統一ある日本的活動として實現され、又現代人の社會現象は、現代文化の特殊的性質によつて、ひろく一種の統一性をあらはす現代生活として把握されやう。時代と民族內部における部分的各集團の社會過程の場合においても、事柄は又同じい。現代プロレタリア階級內部の動きは、それの有する特有のイデオロギーの性質によつて統一化され、東京の大都市生活は東京固有の風俗慣習の態樣によつて一齊に特質づけられ、個々の會社、學校、倶樂部に於ける作業、活動、生活も亦、夫々それらの集團の有する社會制度(規約!)によつて秩序づけられること、悉く皆然りである。要するに、文化環境の制約の下に、社會過程は集團毎に統一せられ、特に齊一的集團活動たる實を示し來るのを見るのである。[3]

註1　かくして、自然科學的社會學の價値は今は部分的に容認さる可きであると同時に、結局それが環境的一條件を說明原理としたことによつて、總べての環境條件を見通さず、又況んや凡ゆる社會的條件を等閑に附したことにより、決して社會學的研究に置き代り得ないものであることは、玆に明瞭となる。

2　社會形象に關する論述は私が『社會學原論』第三篇第四章に試みた所であり、又「社會形象論序說」(東京社會學研究會、『社會學研究』第二輯の內)に一層立入つて說明した所であつた。今讀者はこれを參照せられんことを望む。

3　文化環境の制約は社會形象の拘束性の問題として(デュルケムは社會拘束と稱した!)社會學上中心的題目の隨一である。フイアカントは「超個人的勢力の運載者として人々相互作用を行ふ」と見る(Vierkandt, Gesellschaftslehre, 1. Aufl. S. 31.)。然し彼の如くに如何なる社會過程も然りといふ風に本質論化したのは(S. 33.)當らない。ホツブハウスの如きも如上の拘束的事實に見る所あり、「社會的問題は本質的に組織の問題である」と稱した(Hobhouse, Social develop., p. 115.)。組織とは此場合、文化的秩序化をいふのである。マクドウガルまた社會的統一化に關し自然的繁殖が本能、慣習、道德の宗敎的制裁等によつて補强されることを述べる(MacDougall, Group mind, p. 259.)。彼は同時にこの統一化を破るものが理性と反省であり、理性と反省とは個人快樂的、安寧を追求することで文化的統一化を妨ぐるとなすが、これは理性と反省が文化諸形象を合理化の方向へ變革する役割を演ずることあるが故であらう。然し、これと同時に理性と反省が又新しい文化形象の創始に役立ち、この文化形象の環境的制約によつて集團活動的統一化の可能なる反面をも吾々は當然考ふ可き事である。ストルチンベルクは別に擧示した心理・精神・集團の對立・交涉觀において(前節註7)精神の意味を社會的文化形象と考へ、精神集團學を構想したがこれ部分的に本節の問題を包含する(拙著、社會學論及學說、七九頁以下參照)。かくの如きあらゆる問題は私が社會形象について論ずる他日の機會を俟つて詳述したい點である。ここに注意さる可きことは、社會過程が文化環境により制約を被る際、集團活動の性質的統一性として浮び出るものが、文化形象の集團的特異性即ち私の名づけて社會性(文化形象の集團的性格!)以外のものでないことは、容易に理解される所とする。併し乍らこれ故に集團的文化性格たる社會性と集團活動とを混同するのは警戒すべきことであつて、集團活動とはかかる文化的特異性を統一的性質・特色として鑑別される社會過程の一群であつて、本來現象形態に外ならない。然るに、社會性は今この現象形態にその影を投じた文化環境の持つ特殊的屢

性たるものである。

此文化環境の制約ときの自然環境にふくまれた人口的制約の二つの條件をとり出すことにより、コストは民族力の測定をなしうるとして社會測定學（Sociométrie）なるものを考案した。その公式次の如し（A. Coste, L'experience des peuples, p. 65.）。

Puissance Nationale = Population × Socialité.

ここに彼が社會性（Socialité）と呼ぶは Qualité Sociale（社會的性質）であつて、社會文化狀態の如何をいふ。此コスト的社會測定學に對する批判は、彼が何故自然環境の內人口のみをとり出したか、殊に彼のあぐる人口、文化の二環境以外、社會過程を制約する條件他に存するなきやの點より與へらる可きものである。

四　統制的制約

扨て、以上に於いて集團結合よりする所の、又自然環境並に文化環境からする所の社會過程の集團的統一化に就いて述べたのであるが、これ迄の諸制約は集團結合性の或る種のものを除いては、社會過程の性質上の統一化を齎すものか、それ以上に出て、方向上の統一をもたらす場合にも個人主義的であるに止り、かの齊一的集團活動を歸結するに過ぎなかつた。[1] すなはちそこには唯集合的統一現象のみが支配したことであるが、然るに吾々にして若し文化環境からの制約についてよく〳〵分析するに至るならば、それによつて歸結される集合的統一現象卽ち一見共一的集團活動としか受取り難いものの內に於いて、新に集團中心的な方向上統一ある所謂綜合的集團活動の隱蔽され、內包されて居るのを發見するに至る。そして、そのものに關して實に社會統制といふ最も有力な制約作用の存在することを氣付かずには居らないであらう。既に述べたやうに、文化環境として社會制度、風俗慣習、思想、イデオロギーの諸種類が數へられるのであるが、其內思想・イデオロギー中の一形態として集團全體の生活原理とも謂ふ可き樣な「社會的自我意識」が存在する關係にあり、此社會的自我意識の存立を見る場合に於いて、社會過程は一樣にその拘束を被り、集團全體の生活の爲めにする方向上の統一化を具現し、全體的集團活動を實示するやうに制約せられるのである。

併し乍ら、この事實の理解の爲めには所謂社會的自我意識なる思想形態について、ここに少しく說明を費さなければならぬ。社會集團は社會過程の展開、生動する人間的地盤・範域であるが、集團人にしてその社會過程或は社會的行爲の一部として單に各自の個人的立場に立つて思考し感得するのみならず、又時に個人的立場を超越して集團全體の立場に於いて觀念し感受することは普通の現象であつて、かくの如く集團全體の立場に於いて卽ち集團中心的に思考する限りの問題としては、個人的立場に立つて考慮する個人主義的思惟が幾多の個人主義的思想形態（倫理思想、經濟思想等々）を組立て結晶するがやうに、又全體主義的思想形態の何等かのものを成立せしめる。[2] これがとりも直さず社會的自我意識をなすのであるが、そのものは矢張り集團人の總べてによつて集團全體の問題に關し支持採用される標準的思考の雛型であるから、一般文化環境の一種として社會過程に對する制約を發揮し、社會過程を性質的に統一化する。然るに、之れによつて統一せられる社會過程の性質は、特にこの場合に於いて集團中心的傾向であるが故に、社會過程は實際上集團中心的に方向上の統一を賦與せられる。社會的自我意識が集團全體の生活原理と見做されるのはこれが爲めであり、これによつて綜合的集團活動が確定的に實現される。

社會的自我意識のあらはすこの特殊の集團活動への制約は、適當に之を社會統制と呼ぶ可きものに當る。從つて此種の制約は社會統制の制約であり、統制的制約と略稱し得るであらう。例へば社會理想、集團意志、輿論、集團感情

等々の作業がその個々の現はれをなして居る。そこで日本主義、國家の意志、普選の輿論、非常時的感情の如きは、悉く社會的自我意識の實際の姿であり、それらのものの支配下に社會統制と方向上統一づけられた集團活動の發生が認められる。而して、社會的自我意識の諸形態は集團人の高度の自覺によつて顯在意識的に組成され支持することあると共に、低度のものとして無自覺的に、潜在意識の作用によつて生成・採用せられる場合とが存し、[3] 前者の社會統制が多くは統治形式を伴ひ、後者のそれが一般に所謂慣行形式を以て行はるることを注意する結果、吾々は統制的制約の作用について政治的統制の制約と、慣習的統制の制約の兩現象を區別し與ふと信ずる。先に全體的集團活動の事實に關し、政治的集團活動なるものと慣習的集團活動なるものとを類型化して對立的に把握したことが、ここにその眞相に於いて理解を得るであらうと思ふ。然しその孰れの場合にあつても、現象を規制し出す所のものは社會的自我意識と呼ぶ全く特殊なる文化環境の制約であつて、その機能より云つて、究極に於いては社會統制の制約といふことに歸着するのである。[4]

註1　一體感的ゲマインシャフトの結合及び公共的ゲゼルシャフトの結合が例外的に集團中心的な方向上の集團活動を呈出することは、本章第一節に於いて指摘した所であつた(四〇九頁)。

2　社會的自我意識に關してのみならず、思想・イデオロギー一般、更に又社會制度、風俗慣習の總べてが集團内部に組立てられ、凝結せしめられる手續に關する説明は別の機會に於いて私の詳述しやうとする所である。今は必要なる程度に從つて示唆を與ふるのみに止める。

3　社會的自我意識の各種の内容についても、それらのものが顯在意識的に作爲される場合と然らずして潜在意識によつて知らず識らずの間に作り出される等の問題についても、詳述は他日私が社會形象論を試みる折に讓りたいと思ふ。例へば輿論は顯在意識的作爲の手續によること多く(これ故にエルウッドは「自覺的社會統制」を云ふ Ellwood, Psychology of human society, pp. 173 ff.)。集團感情は逆に潜在意識の動きによつて作り出される。事柄はこの例示を以て一應の承認を得るであらうと思ふ。

4　ホッブハウス曰く「それは社會の最大の統制力であつて、主に間接的、無意識的に働くのであるが遍在的である。そしてそのものは、一層直接的且意識的な、慣習と法律の統制から援助される」と(Hobhouse, Social develop., p. 187.)。彼も亦前半に於いて慣習的統制を後半に於いて政治的統制を示唆して居つたのである。

ギーザーは社會的事業(Werk)に全體的事業(Gesamtwerk)と部分的事業(Sonderwerk)とあり、全體的事業は支配的指導を必要とし部分的事業は自由的指導に特色を有すと。これ社會統制が概して制壓現象としてあらはるる所以を云へるものであらう(F. Wieser, Gesetz der Macht, S. 418.)。

社會統制の活躍が文化統一期(例へば北米の奴隷廢止時代)非常時・戰時等において頓に盛んとなり、全體的集團活動が顯著となる事實等についても、社會的自我意識—社會統制について論ずる機會を俟つて説明を充分ならしめるであらう。

五　集團活動の歸結

社會過程は現實に特定集團を單位とし統一的傾向をあらはし來り、これに從つて集團活動の概念が滿足されることは、如上説明した所を以て一般的に明らかならしめられた所であるが、社會的行爲乃至社會關係現象等の要素的或は環節的社會過程の形態は、ここに集團的に統一化された樣相を示し來ると共に、果して如何なる歸結を全社會事象の上にあらはし示すに至るであらうか。これが集團活動の問題に於いて、新に吾々の課題となる所のものである。これはとりも直さず集團活動の效果如何といふ問題であるが、抑々集團活動と雖も根本においては、集團人の營む要素的な社會的行爲の集大成せる總體的形態に外ならぬものであるからして、この要素的社會行

爲と、並に要素的社會行爲が夫々の對應性に從つて組をなし、環節的統一を作り出した社會關係現象とにおいて吾々が先に檢證した作用以外のものが集團活動から齎し出されることは到底考へることが出來ない。[1] 集團活動の一般的效果は從つて、社會過程の一層下級的樣式たる社會的行爲並に社會過程の成果そのものに完全に一致することは之を斷言して憚らない。乃ち社會集團並に社會形象等の社會過程以外の社會的事象が更改・變形を被り、これがために社會事象の變化、流轉が引起され、社會事象の進歩と退行、發達と還元が廣く惹起されるといふことになる。

かくの如く集團活動の社會事象界に與ふる效果が一般的に概觀されるのであるが、併し乍ら總べての社會的行爲や社會關係現象の事實が、未だ集團的統一傾向を呈示するに至らざる場合を想定し、而してそれに對し彼等が特に集團的統一化の條件・制約の下に於いて集團活動の段階に立ち至つた狀態とを比較するならば、吾々はこの比較問題から集團活動の特殊的效果を抽出し得ない譯ではない。そしてこの種の特殊的效果こそ、恐らく吾々が理論的に集團活動の固有の效果として究明するに足る價値を有するものであらうと信ずる。かかる意味に從つて、吾々は二つの注意すべき事實を發見するのである。二つの事實とは、一は社會過程の統一化故に成立つ效果の一定といふことであり、二は社會過程以上の社會事象たる社會形象がこの統一化の內に副次的な支援を遂げるといふことである。一は量的效果と考ふべく、他は質的歸結と見做す可き所である。[2] 然し、その眞の意味よりすれば、前者は社會事象の外側的問題であり、後者がその內部的問題を形作る。その理由は、效果の一定の事實が社會過程が動態的社會事象として他の靜態的社會諸事實に比し、獨特の作業を確定的な仕方において實現するに外ならないものであるのに、社會形象といふ別個の社會事象が底礎附けられて行く關係は、社會諸事象相互間の連接問題として明らかに內面的意義を有するが故である。

先づ第一の事實より述べるであらう。社會集團內部に於いて何等集團活動に立ち至らざる亂雜なる社會過程のみ行はれる狀態は、實の處例外的であるが決して想像に困難ではない。[3] 然るに、更に外形的集團活動にてもあらはれるならば、この種類の集團活動が許容する社會過程の方向上の亂雜はなほ殘留・內在せしめられるにせよ、社會過程の諸效果は性質上統一を齎らされることによつて、少くとも性質的な確定度をあらはす。それは最早や全然蕪雜なる凡ゆる意味での困亂性ではあり得ないであらう。然し、[4] これに吾々が效果一定の第一歩を立證せんとすれば、寧しろ誤りである。效果一定の第一歩は實の處これには存せず、これは實質的集團活動を俟つて始めて可能のことである。蓋しこの狀態に立ち至るならば、これは社會過程が方向上統一化せしめられたものであるから、個々の過程的效果は明らかに集大成せしめられ、單に效果の矛盾・混亂が匡救されるに止まらず、個々の效果の集成・綜合によつて、量的關係において社會過程の效果が著增せしめられること明瞭である。殊に實質的集團活動が一齊的形態より全體的段階へ進むにつれ、この事は否定す可からざる歸結をなすであらう。集團活動の方向上の統一は、この集團本位の主體性の擡頭することによつて、その效果を加算的に遞增せしめる許りでなく、倍蓰的に激增せしめるのを見るに至るが故である。

註1　本書、第二部、第二篇、第三章、第七節並に、その第三篇、第三章、第三、四、五章。

2　これが質・量の對立に非ざることは後述する所からよく了解されやうと思ふ。

3　卽ち集團的制約の幼稚狀態例へばそれが唯接觸集團にのみ止り（初期植民地！）、環境的制約において自然環境のそれは存す

るも未だ文化的環境を蓄積するに至らず、統制的制約も亦從つてこれを缺く場合(文化混亂期!)等。

4　吾々は共一的集團活動の類型を分つた場合（本篇、第二章、第三節）、これを以て亂雜なる社會生活の狀態としたが、この狀態が限界的にさきの未だ共一的集團活動前の無雜狀態に連接はしても、積極的には既に若干秩序の萌芽を認めうるのである。

六　社會形象への關係

集團活動が、分析的に社會的行爲・社會關係現象等から成立つことによつて、實際に於いてその效果がそれらの下級社會過程の諸形態のいとなむ效果以外のものでないにも拘はらず、集團活動たる統一、秩序、組織の存することあるにより、效果著增の事實があらはれることは如上說明せる所であつた。吾々はこの事實を以て實に集團活動の業績上の效果と見做すことを得るであらうと信ずる。[1] 然るに他の一方における問題として、かくの如き單なる業績以外に、社會過程が特に集團活動化する場合、社會事象の社會過程以上の一事實をなす社會形象なるものが支援・底礎附けられて行く事實を看過する譯には行かぬ。蓋し、社會形象とは社會集團內部に社會過程の營まれることから自然組立てられるやうな、社會的構成物の總べてを意味し、その要素として社會制度、慣習、イデオロギー等、一言にしていへば文化諸內容をいふのであるが、此種のあらゆる文化的社會形象は社會過程の上記の意味における凝結物たる點に從ひ、定義的に社會過程の所產であるが、而もこの關係において注意せられなくてはならないこととして、文化的社會形象が實際上社會過程が集團活動の化する事實によつてその成立・存在を立證し、この意味の下に、その事實が集團活動から支援・底礎附けられる關係の存すること是である。

抑々社會形象、卽ち內容的にいつて文化的構成物が如何なる社會學的事實であるかを說明することが問題解釋に向つて誘導的手續をなすであらう。然るにそれに要素をなす社會制度、慣習、イデオロギーのいづれのものに就いて云ふも、文化的社會形象は集團人の一般がそれに準據して行爲す可く、標準視しつつある所の行爲の雛型以外のものではないのである。文化的社會形象はその意味に於いて各人の社會的行爲の標準的雛型そのものである。從つて吾々はそれを換言的に、集團人の齊しく遵奉する生活樣式であるとなすを得るであらう。[2] 文化的社會形象が、ここに吾々の略述するやうな、集團人の齊しく遵奉する生活樣式であるとするならば、若し人々の現實生活において行爲がその軌を等しうして營まれるならば、吾々は多くの場合文化的社會形象の背後に於ける存在を豫想して差支ないことである。實に、實質的集團活動に關し吾々が文化的環境制約を擧示したのはこの關係に於いて存在理由を持つものなのであつた。人々一定の生活樣式を標準的な行爲雛型として之を外部に表象する限りにおいて、彼等の實際生活は勢ひこの生活樣式をそのまま現實生活上に具體化・表現する。これが集團活動の環境的制約の問題と見做される點に、文化拘束の題目が取上げられたことである。[3]

併し乍ら、この文化拘束の事實と共に、それとは多少異る事實のふくまれることはないであらうか。つまり、實質的集團活動によつて、人々の行爲がその軌を齊しうして行はれる際、之を豫めしかく制約する所の文化的環境が未だ存在せざるにも拘はらず、他の諸條件の規制によつて集團人の行爲が一齊に或る一定の生活樣式を點出するに至る偶然の場合も之を考へなければならぬ。思ふにその例としては、集團的制約並に自然環境の制約の相一致する場合を考ふ可きであらう。[4] その樣な場合にあつて、人々の意識は容易に當該行爲の標準的雛型たることを反省し、悟ることであるが、又恫時に他の總べての集團成員が一齊に同一の行爲に出づることを見て、その標準的雛型性を是認するに至

るのである。果して然りとすれば、實質的集團活動の實現はそれ自體において生活樣式たる文化的社會形象を支援し底礎づける一面を備へること確かであつて、吾々はここに集團活動の社會形象存立に對する刺戟的效果を認めなければならぬ。而して問題はなほ一歩を進めて、假令文化環境によつて制約された實質的集團活動と雖も、集團活動化することによつて反つて又之を制約する文化的社會形象を强化・確立する事實迄之を見通さなければならないこととなる。[5] 要之、集團活動の實質的類型は、社會形象に向つてそれの生成を刺戟し、或は强化・確立する所の支援、底礎附けの效果を營むことを認識しなければならぬ。

註1　私は前節において表面的に之を量的問題であるとし、又その眞相において外側的問題であるとなしたが、今その實質が業績に關するものなることを明らかならしめたのである。

2　私はそれ以上ここに社會形象の事實に關する說明を差控えねばならぬ。社會形象は社會事象の重要なる一方面の事實として、之を全く別個に詳述する機會を持ちたいが故であつて、一般的說明としてこれ以上の叙述は、讀者が拙著「社會學原論」、第三篇、第四章を參看されんことを望むに止めたい。

3　本章、第二節參照。

4　實例として、群集心理、突發事に際會した國民の思考・行動等があげられやう。

5　例へば示威運動といふ現象は、外部に對する示威であると共に、實は又內部關係において集團活動を齊一に行ふことから、集團的イデオロギーを强化・確立する副作用を伴ふ。示威運動はこの點に於いて對內的意義を有するのである。

七　社會過程の自由性

社會過程が現實に特定集團を單位とし統一的傾向を呈示し、これに從つて集團活動の概念が滿足されるに至ることは、如上に說明せる所を以て一應明らかなことであるが、集團活動を規制する各種の制約條件を檢討した上において、吾々がここに當然考慮しなければならないことは、社會過程の集團活動化一般がそれら諸條件によつて規制されるに際し、集團活動としての統一化の程度そのものが、又同時に如上に數へた諸條件の確定狀態如何に依存するといふ點である。すなはち、制約諸條件の確乎たる存在はいづれの場合においても、集團活動をして顯著のものたらしめ、逆に、それら諸條件にして曖昧なる存在をなすに止るならば、それによつて規制される集團活動も亦勢ひ微弱であらねばならない。この事は原則上、總べての制約條件に就いて云へるのであるが、外形的集團活動の類型に對する自然的諸環境の特殊性の程度の如き、齊一的集團活動の類型に關する文化環境の確定度の如き、又、全體的集團活動の類型に對する社會的自我意識の完成程度の如き、いづれも著明なる結果を集團活動の狀態に齎すものであると稱し得やう。[1] 畢竟するに、集團活動の性狀如何が制約諸條件によつて規制される所であるのみならず、集團活動の樣相も亦一義的に制約條件の確立度によつて左右され、集團活動の實際を見通す可く、それら諸條件を顧慮することは不可缺となるのである。[2]

かくして、集團活動への制約諸條件が集團活動の實際を決定する所以が決定的なのである。併し乍ら、他面において、それら集團活動制約の諸條件が如何にあらうとも、集團活動の實質をなす構成內容は社會過程以外のものではなく、要素的に云つて集團個々人の行爲たるものであるからして、この動かす可からざる事實によつて、如何に周圍の制約諸條件にして之に一定の性質を附與し又一定の方向に仕向けやうとしても、個々人特有の行爲性がすべて全面的にそれによつて規則され盡くすものではないであらう。否、事實は細かく觀察するならば、それから甚だ遠ざかつて居る。個々の集團人の行爲は全然同じやうに制約諸條件に反應するものではなく厚薄の程度を異にするのみならず、

間々その決定を免れ或は又制約に反抗することによつて、集團活動の一致を亂し、諧調を素すものさへもない譯ではない。個々の場合、集團團結に照應することのない行爲が誘發せしめられ、環境狀況に不一致なるやうな行動が觸發せしめられ、又社會統制に背反するが如き思考の誘起せしめられる等は、その基本的類例をなすであらう。要するに問題は、集團活動と雖も本源的に個々人の行爲に始まることによつて、如何にそれが集團的に統一化される條件の下に立つとしても、究極においてなほ個人性を殘留せしめるといふことである。

この事實は、之をよくよく分析的に觀察するならば、先づ集團人個々が特異的存在であること、次にそれにふくまれる個々人の意志の自由に職由すると見做す可きであらう。個々人の特異的存在は彼の生理心理的意味における個性と並に彼の身邊を圍繞する境遇から成立ち、個々人の意志の自由は外部的チヤンスの岐路に立つて、選擇の任意性を有することに存して居る。かくして凡ゆる集團活動の內容は、その主要なる一般傾向において統一的であつても精細には個人的行爲の不羈性を內在せしめつつあるものとしなければならぬ。甚しき場合にあつて、意想外のアブノーマルな行爲であつて、積極的には發明や獨創を具體化し、何等か新しい文化形象の生成されて行く胚種をなすが、消極的には不道德・犯罪の事實をなし、反つて既存の文化形象を破壞するものと見做されるものもあらう。凡ゆる社會過程の內に、若干のアブノーマルな行爲が嘆賞・禮讃され、或は又逆に擯斥・懲罰されることを見るのであるから、吾々は社會過程が必しも集團活動を制約する諸條件の爲めに悉く規制・支配されて餘蘊のないといふ風に事柄を考ふ可きでない。[3] ここに於いて、吾々は集團活動を以て社會過程の特定一樣相を是認する反面、如何なる高度の集團活動の形態についても、社會過程の自由性乃至不羈性といふことを、留意し容認する用意がなければならないのである。

註1　其他集團的結合狀態と程度とが、相互的接觸の狀態はその特異性の度合を以て、ゲマインシヤフト的結合はその深さの程度を以て、又ゲゼルシヤフト的結合は協同・提携性の確立の程度を以て、それぞれ集團活動の狀況を左右することを思はなければならぬ。

2　かくして、集團活動に關し私のさきに揭げた類型の如きも亦、制約諸條件からこれを觀望して始めて充分なる理解を遂げられるの明らかにしやう。ここにその例示として一二の例證をあげておきたい。スペンサーは政治的集團活動の類型を以て、古代に支配的である軍事型社會の特徵であるとなしたのであるが、これは彼も亦それを認めるやうに當時の集團間の慢性的戰爭關係の結果であり、慢性的戰爭關係の支配故に社會的自我意識が刺戟され顯在的に確立せしめられ、全體的集團活動の形態たる政治的集團活動が規制され、そこに彼の所謂軍事型社會が成立つ。これ然し社會生活の古代性と必しも必至的關係がなく、むしろ集團對抗による社會戰自我意識の生起と覺醒とに起因することであるから、現代にても同樣の事情が生起すれば同樣の結果を見る。非常時的社會狀勢が政治的集團活動を各國に於いて現に旺盛ならしめる事實がそれに當るのである。スペンサーは集團活動の制約條件に思ひを致すことを怠つた結果、政治的集團活動を古代にのみ釘附けして考ふる誤謬に陷つたのであつた。

全體的集團活動に關し、ギヨーは快樂 (plaisir) に於けるよりも苦痛 (douleur) に於いて一層力强きものあるを云ひ、彼は國民が祭禮の場合よりも祖國の危機の場合に於いて擧國一致化するをあげた (Guyau, Education et hérédité, p. 36.)。一見これに反する觀察はロスが同種の集團活動を論じて、攻勢の場合に於いて防禦の場合よりも優勢なりとしたことに發見される (Ross, Principles, p. 159.)。これ全く社會的自我意識の確立、覺醒がいづれの場合に於いて力强く行はれるかに依ることであつて、この條件より見通して始めて理解される事實たるのである。

3　試行的行爲として集團原理や環境條件にそぐはざる過程の生ずることも亦その內に數へられる。然しこれが周圍の條件に順る。

應せざるを知るならば、即ち錯誤なることを明かにすれば(試行錯誤!)、これは改められて條件・制約に一致する傾向を持つに至る。例外的行爲は、消極的に意想外視せられるのみならず、積極的に擯斥される。これ「不道德の行爲」となる所以。「不道德の行爲」は慣習的統制を裏切る場合特に切實にその責任を追求される。その極は政治的統制に背反する「犯罪」となるのである。デュルケムが政治的統制に背反することから起る刑罰の反作用に就いて「犯罪」を定義したのは、これ故に正當であつたのである (Durkheim, Division, Ch. II.)。

八　社會過程の回顧

吾々は社會過程を見るに動的社會事象の隨一、而して實質的にその唯一の事實であると考へた。ではあるが、動的社會事象たる所の社會過程はそれ自らが決して簡單明瞭なる一事實をなすのでなく、社會學的眼光の下に招致される場合、少くとも個人單位的なその樣相・關係環節的たるその統一、而して更に又社會過程に對し地盤となり、範域となつて居る社會集團を限界とするその秩序乃至組織について正確な概念規定と考察とを費す必要があつた。吾々がこの要請に對し一般的に對應する意圖の下に、先づ社會的行爲を取扱ひ、次に社會的行爲の說を土台として社會關係の現象に攻究を進め、而して最後に、此等社會的行爲或はその關係的統一形態たる關係現象といふ要素・因子が、內外の條件の作業と相俟つて集團活動的事實を實現・結果する關係を解釋するに至つたのは、これが爲めであつたのである。社會過程のあらゆる隅々の現象がこれによつて徹底的照明を與へられ、一擧にして各部面の事實が把握されるに至つたと思惟する如きことは、吾々の夢想だにしない所のものであるが、個々の微細な社會過程に屬する事實が、如上の一般的吟味によつて、一歩社會學的研究の方式下に編成せらる可きやうな正しい準備工作を施された點は、躊躇なく主張しやうと欲する所である。

但し、吾々の考察にあつて、この社會過程に關する場合に於いても亦總べて說明の出發點を個人にとつたことは、或は社會過程の事實中個人近接的特質を有する、要素的・原子的所與と考へ得られる社會的行爲乃至關係現象に優位を認め、之に對し、これらの因素を素材として成立つて居る集團活動を蔑視するかの誤解を生ぜぬとも限らないであらう。實踐的社會生活の內に新に擡頭した或る種の狀勢が殊更高度の集團活動を要望する形勢の內に於いて、個人的存在を輕んずることによつて、社會集團を又單なる集團的團結以上社會的構造性を昂揚・顯現する意氣込みを瀰漫せしめ、結果として、この種の誤解が情意的な支持さへも與へられて居る。純正なる實在科學的研究がこれに對し反つて迎合する節なしと嘆ぜられるのであるが、[2] 科學的攻究は要するに事實の論理的認識であつて、論理的認識に際し吾吾が事實に立證的支點を求め、これを槓杆として一層疎隔せる事態の理解を達成せんとするは、是れ方法論上公理をなすものでなければならぬ。個人的關聯から出發することが認識的に不可なのではない。個人的連關から發足すると雖も、有意義な集團的事態を等閑に附せず、これを論理的に秩序づけて解釋することが問題の存する所なのである。而も吾々が假に個人的關聯を認識の起點とする所以は、ここに事實の高度の直證性を是認する妥當なる見解に立つが故である。

併し乍ら翻つて云へば、社會事象は社會集團存在し、この集團的地盤を俟つて社會的行爲より集團活動にまで發展する社會過程が生動する許りでない。かくの如き社會過程の生動がやがて諸多の構造・凝結物を組立て或は沈澱し、而して此種の構成物・沈澱物こそ、吾々が機會ある毎にそれに觸れたやうに、それ自體社會的一事實をなし、且又爾・余の社會集團、社會過程等の事實・現象に向つて大なる影響を與へる特別の關係を持つ。吾々はこの最後の事實を總

稱して社會形象と名づけるのであるが、この社會形象の事實に就いては特に超個人的性質を容認し得る者であつて謂ふ所の個人主義的見解の否定と全體主義的立場の價値附けが妥當する所の點をふくんで居る。[8] 吾々は今社會過程論を閉づるに當つて、なほ考察されずに殘されてある社會事象の形象的側面・要素が著しく重要性を有する事に想到し、充分なる準備を以て之に對處す可きことを事新らしく意識に上せる。そしてこれと共に、その考察に當つても亦固有の實在科學的方法を最も忠實に貫徹しつつ、而も又、社會形象の超個人的特性を基礎附ける措置に出でたいと思ふ。トレルッチの曾て云つたやうに、社會事象の存在と發現とは認識者の側におけるあらゆる尊倣を戒める。吾々は心靜かに前進を企圖するであらう。

註1　私は顧みて第一篇社會集團論に於いても、又他の機會公刊せんとする社會形論象においても、同樣の態度と抱負を有し、又敢て有せんとする者である。

2　作田莊一教授はその『國民科學の成立』に於いて、あらゆる角度まで個人主義的認識を止揚した全體主義的、而してその歸結において民族的特殊認識を樹立せんと企てる。形式上に於けるその全體主義の方法たるや、實在科學性を斷念しない以上科學的原理に對し派生的問題であらねばならぬ。科學的約束より全體主義を誘導することなく、全體主義より科學的原理を演繹するかに見える教授の論旨は本末顚倒の譏りを免れるものではない。教授が實質上に於いて、民族的特殊認識を主張するは部分的に文化社會學、特にイデオロギー論に迎合する點をふくむが、元々教授はイデオロギー論に關する充分なる基礎的見解を有して居るであらうか。私は之を怪しむ。所謂國學的イデオロギーを漫然と前提しつつ、文化社會學の原理に苟且するが如きは、舊酒を新しき革囊に盛るに齊しく、而も新しい革囊が無批判的にとり入れられて居る以上、純正なる國粹主義は反つて面を背けるであらう。

全體主義問題に亘る關係において圓谷弘氏の體系(『集團社會學原理』)が再び批判さる可きである。氏は「集團生活の意識の集積層を通して意識の志向性が働く」といふことを原理として――これ社會學的常識以上の何ものでもありえないが――社會事象を論ぜんとする。思ふにこの企圖は社會形象を嚮導原理として凡ゆる殘餘の現象・事實を見て行かうとする。氏が社會意識を主題としたのは乃ちこれを示唆して餘りあらう。然し、氏は社會意識を唯卒爾として提出し、「集團生活の意識の集積を通して」一體どうそれが構成されるかにふれず、無責任極まる個人主義排斥の放言を以てお茶を濁すのみである。進んで云へば、氏の中心問題たる社會意識論と雖も初學者のレポート以上に出でて居らぬ。實踐において排拒す可き個人主義は科學的認識に於ける許されたる個人出發的說明(說明原理)と同日に論ず可き筋合のものではない。問題をある現下の政治的傾向と結びつけて理論の不體裁を虛飾し、一方に於いて何等本然的關係の乏しい現象學論を持ち出すなど、混亂これより甚しきは未だ聞かない所である。この書を批評紹介した早瀨利雄氏が、かかる際に於いてこそ氏の得意とする「社會學批判」を下す可きであつたのに拘はらず、提灯持ちの論旨に出でたことは誠に心外であつて、所謂社會學批判家の學術的耳心の奈邊に存するやについて唯啞然たるのみである(雜誌「社會學評論」第四號所載、圓谷弘著『集團社會學原理』早瀨利雄紹介批評)。

3　私は社會形象を論ずる他日に於いてその委曲をつくしたいと思ふのである。

15416

昭和十二年四月二十五日　初版印刷
昭和十二年五月一日　初版發行
昭和二十三年九月十五日　八版發行

定價　參百五拾圓

著者　松本潤一郎

發行者　八坂淺太郎
東京神田駿河臺
京都田中西浦町

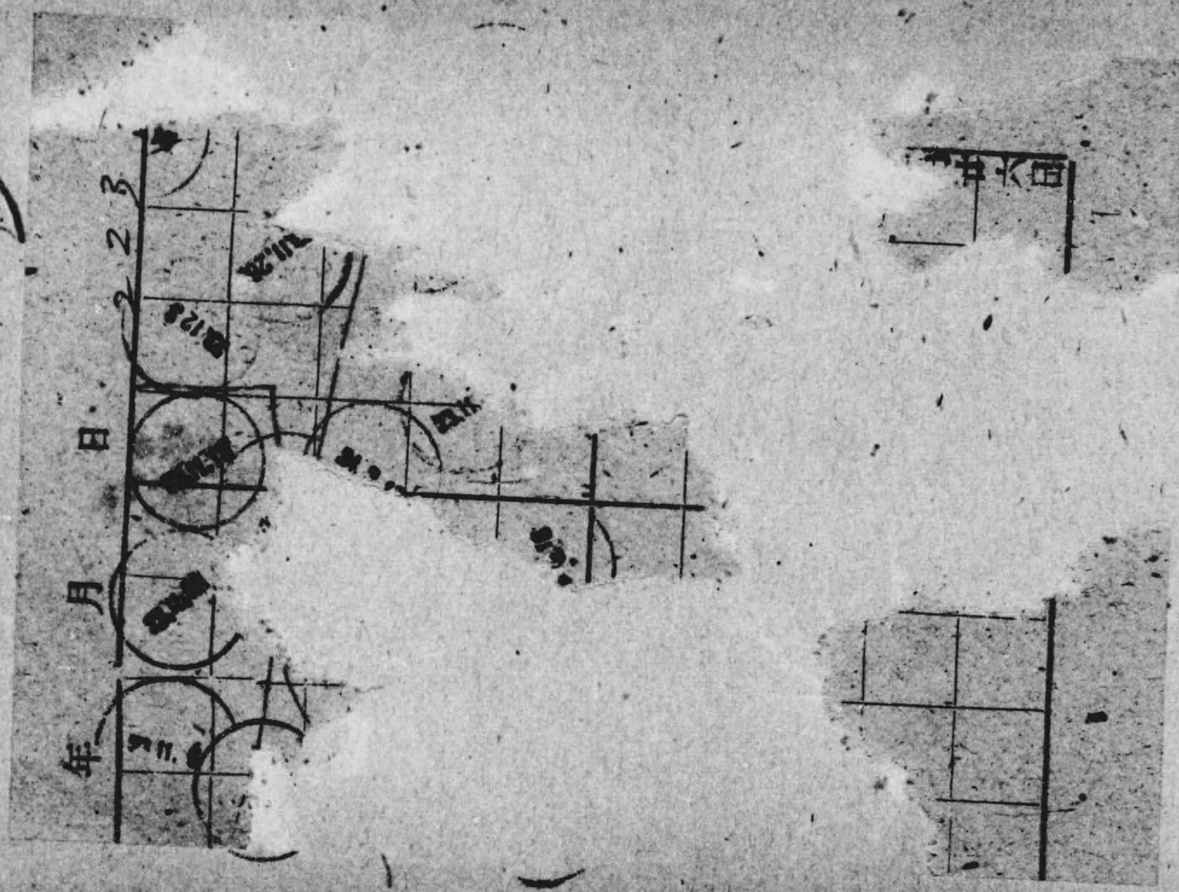
印刷者　中内佐光
東京千代田飯田町

配給元　日本出版配給株式會社
東京神田淡路町

發行所　弘文堂書房
東京都千代田區神田駿河台
會員番號A一一一〇二八
電話神田一一〇六七八三二〇

（落丁本などに就ては責任を持ちます）

木製豆久榮・刷印曉


年
月
日
2
3

361
Ma81-4